

【論文】

野外博物館総論

General Remarks on the Field Museum and Open Air Museum

新井 重三*
Juzo ARAI

1. 序 論

我が国に欧米型の近代博物館が導入されて以来、1世紀が経過した。その間、政治的にも経済的にも幾多の動揺はあったが、こと博物館の発達という点からみれば順調な歩みを続けてきたとみることができるであろう。特に第二次大戦後の発展は目覚ましく、戦前の博物館を知る者にとっては隔世の感をおぼえるであろう。薄暗くてカビ臭いというイメージはどこにも見当たらない。むしろ、いま生まれている博物館はホテル並みの豪華さの感すらするのである。もはや我が国の博物館はその数においても質においても先進国の上位に位置していると見ることが出来る。

博物館ブームと言われ出してから半世紀を迎えようとしている今日でも、その勢いは一向に衰えようとしなない。従来は国立、県立が主流であったが現在は地域の底辺に根を下し始めている。この背景、秘密はどこにあるのだろうか。

(1) 村おこし。町づくりの花形として野外博物館の浮上

経済の高度成長は一見定着したかに見えるが産業構造の変革の嵐は業種によっては決定的な打撃を与えている。特に石炭産業、金属鉱山、造船、製鉄等の巨大産業の崩壊は同時に、それらの産業の城下町と言われている都市の前途に暗い影を投げかけている。一方では人口の都市集中化、農林業の不振等は農山村の過疎化を増幅させ、それらの自治体は彼等の運命をかけて新しい活路を求めている。

地域の再生と活性化を求める叫びの中で生まれたのが、いわゆる「ふるさと創生」の呼びかけであり、それを裏づけるリゾート法(総合保養地域整備法)である。地域社会が打ち出した活性化対策を分類してみると次の5分野になるという。①観光リゾート型 ②博物館~文化教育型 ③イベント型 ④姉妹都市提携型 ⑤工場誘致等経済振興型である。識者は地域活性化の要諦として「自分の足もとの地域を見直し、そこから地域の特性をひき出し、これを広い未来的視野に立て伸ばし育てることである」と述べ、さらに「大企業の進出や援助を待つのではなく、地元の手で快適環境の創造を目指す町づくりが期待される」と結んでいる。

さて、上述したとおり、博物館づくりは地域再生への切り札として第2位に浮上してきたことは何を物語っているのだろうか。そして、地域はどんな博物館を期待しているのだろうか。

いま、各地方自治体が模索している博物館の潮流には従来型の博物館とは明らかに異なった思想の芽生えを感じるのである。いま、我が国の博物館は地方自治体の期待をかけた壮大な実験段階に入っていると言えるだろう。

山形市が企画している「町ぐるみ博物館」の構想。東京都板橋区の「まちは博物館」の構想。北海道白老町が立案している「屋根のない博物館」計画。大分県臼杵市、津久見市とその周辺町村を巻き込んだ文化圏が思考している「エコミュージアム・プロジェクト」の構想、埼玉県が狭山丘陵に設置する「緑の森・野外博物館」の構想、滋賀県が企画している安土町、能登川町、五個荘町の3町含めて「地域まるごと博物館」の構想などが端的に

* あらい じゅうぞう

上武大学教授(地球科学)・埼玉大学講師(博物館学)・丹青総合研究所(研究顧問)

連絡先(自宅): 埼玉県与野市大戸2-2-13 Tel. 0488-32-3308

新しい博物館の動きを象徴しているとみることができ。これらの動きの特徴は従来の博物館は地域の中に点として位置づけられたのに対して面に拡げようとする動きであり、かつ博物館の機能を多面的にとらえて経済的価値を掘り起こそうとする動きを汲みとることができる。これらの博物館は、夫々の地域でキャッチフレーズ的な名称がつけられているが共通用語として一様に「野外博物館」を標榜しているのが特徴である。

（2）生涯学習時代と博物館の新しい役割

最近における科学・技術の加速度的進歩と革新は産業体系に変化を与えただけでなく、一般市民の生活、ひいては教育体系にも抜本的見直しをせざる結果となった。昔は親が子供に知識なり経験なりを教えたものだが、今は親が子供に教わる時代になっている。現代に生きるためには昔のことは通用しない時代に突入しているのである。めまぐるしく変転していく社会に生きるためには生涯を通して学ぶ必要性が生じたのである。学校で学んだことも卒業後、いくばくもなく色あせるばかりでなく、その価値すら消失するのが昨今の時勢である。人は生涯を通じて学ぶという必要性が生涯学習時代を招いたのである。

教育行政の大本山である文部省では1988年、従来、博物館の所属局でもあった社会教育局を解体し、その名も生涯学習局と改めて文部省の筆頭局として再登場させたのである。そして、学校教育も生涯教育の一環という認識に立って社会教育に連動させる形で位置づけたと見ることができる。従来の博物館が博物館法（昭和26年）によって社会教育施設と見做され、それなりの活動を実施してきたことは事実であるが、生涯学習は、その定義からみて、さらに的確な教育内容を博物館に要請することになるであろう。従来の観光型一過性博物館、個人を余り大切にしない不特定多数の入館者待望型の博物館、ただガラス越しに見せるだけの「見せ物」的な博物館からは人心が離れていく危険性がひそんでいる。博物館の利用者の方が博物館当事者より先に歩いているようにみえる。従来型博物館に対して利用者からのアクセス権（接近権）を求める声、間接体験（博物館展示）から直接体験を求める声等が連鎖反応となって、前述した野外博物館への志向が高まってきていると見ることができる。いま、埼玉県寄居町では地元の若者グループが集まって「生きた荒川博物館」構造にとり組んでいる。彼等の相言葉は「教室にしない博物館」を目指している。そこには、遊びを演出する直接体験による創造の精神が秘めら

れているようにみえる。ここでも行儀よく見ることを押しつけられる屋根のある博物館から脱け出して、広々とした野外で自分の自由な意志と方法で思う存分学べる「野外博物館」への夢が託されていることを感知するのである。この若者達の心の中に生涯学習の真髄と、博物館の新しい役割が秘められているのであろう。

〔謝辞〕本稿を執筆するにあたり、文部省生涯学習局社会教育課長、沖吉和祐氏ならびに指導研修係長、木村昇氏からは生涯学習について有益な御指導及び図書・文献等御提供をいただいた。また丹青総合研究所の佐々木朝登氏、里見親幸氏、草刈清人氏、堀込憲二氏、石川明夫氏、安井亮氏、竹内健氏ならびに竹中優子氏からは多岐にわたる博物館情報の御提供をいただいたことに対し記して厚く御礼を申し上げる。

Ⅱ. 生涯学習に対応する博物館のあり方

（1）生涯学習とは（定義）

今日ほど変化の激しい社会にあっては、人々は自己の充実、啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各自が自発的な意志に基づいて行なうことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段、方法は、これらを自ら選んで、生涯を通じて行なうものである。以上は昭和56年6月11日の中央教育審議会答申の要約であるが筆者が解説的に整理すると次のようになると思う。

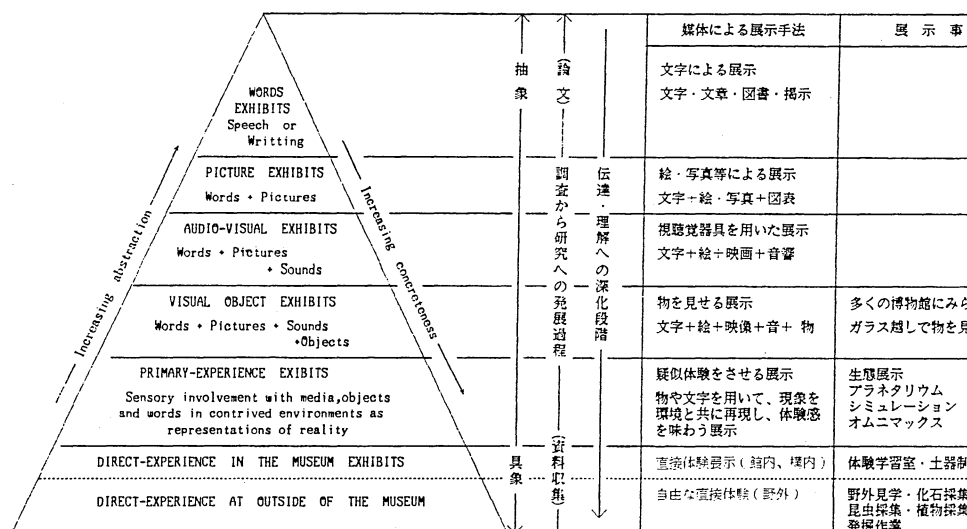
- (A) 学習者：人々の自由意志に基づく学習希望者
- (B) 学習目的：職業上の必要性、生活上の必要性、教養を身につける必要性。
- (C) 定義：(a)個人の自発的意志により
 - (b)自己に適した手段・方法を選んで
 - (c)自己の責任において
 生涯を通じて、くりかえし継続的に学習すること。

（2）公立博物館の役割

公立博物館は地方教育行政の一機関として、生涯学習を助けるために、社会の様々な教育機関と相互協力の態勢をとりながら、その役割を果たすべきである。前述した生涯学習の定義を真面目に考えるとき、従来型の博物館では必ずしも生涯学習の場としての期待には応えきれない課題があることに気づく。

- (A) アクセス利用制度の確立

生涯学習を目的とした利用者に向けて、博物館は、も



第1図：展示媒体による展示型の段階的分類 新井重三（1989）

っと資料と場所と時間を開放すべきである。特に「もの」や図書・文献類に接近できる道を構すべきであろうし、さらには研究室や実験室等も利用できるような制度と態勢ができることが望ましい。

(B) 個人で訪れる学習者に机と椅子ぐらい提供する配慮が欲しい。

生涯学習の原点は個人であることを考えると個人を大切にす館側の姿勢が期待される。その意味において博物館は図書館に多くのことを学ぶ必要があるのではない。分類展示は集団利用者の利用頻度は低いので、生涯学習者のために条件の良い環境にすることも考えられる。

(C) 情報の集積と発信基地としての博物館

図書館と情報が相互に直結しており、その全国的なネットワークも完成しているのに対して博物館の場合は掛声だけに終わっている感が強い。特に利用者向けの対応に遅れが目立つ。利用者からの要望も少ないと聞いているが、それは利用者側に対するパブリック・リレーションの欠落に起因している結果とみるべきであろう。

(D) 展示手法の改善

前述した埼玉県・寄居町の青年が述べていた「教室にはしない展示」は従来型博物館に対する痛烈な批判と拒否反応とみることができる。従来の博物館は先生で、利用者は生徒と見立て展示室という教室で、これでもか、これでもかと物を教え込もうとしていた。そんな展示はもうたくさん、「利用者が劣等感のとりこになる」と言った外国の博物館学者の言葉を思い出す。展示手法には提示型手法と説示型手法があるが後者は理解をさせる展示として評価され多くの科学系、歴史系の博物館に定

着している。いわゆる、解らない者に対して「解らせる展示」であるが、解った先への発展性に欠けている。生涯学習という自己に適した手段や方法を用いて探究する道には通じていないのである。

第1図に示した三角ダイアグラムはDale, E. (1954) のAudio-Visual Methods in Teaching, New York, The Dryden Pressの中で示した展示媒体による展示型の段階的分類の図で抽象から具象へ、具象から抽象へ展示が変化するようにすを三角形を使って説明したものである。この図によって、展示媒体としての「もの」(Objects)を使用することによって具体的な展示が可能になることが理解される。そして、さらに直接体験(Direct Experience)により具象が完成される。前述した博物館の説示型展示は抽象からより具象に進むことを目指している。その現れとして先進的博物館では展示の中に体験学習室とか体験展示のコーナーを設けていることはよく知られている。そして、その延長線に出現するのが、いわゆる野外博物館というところに到達する。野外には人間の手によって作られた教材はなく、素材が一見、無秩序のように散在している。研究者の調査・研究はこのフィールドから始まるのである。すなわち、具象から抽象に向かって進むのが研究の態度であり、学習の過程でもある。生涯学習に対応し、それを受け入れることを考えるとき、博物館は発想を転換して具象から抽象への展示手法を考える時が来ているように思うのである。それを最も可能にする博物館として野外博物館があり、多くの利用者もまた、そのような博物館の出現を待ち望んでいるのではないだろうか。

第1図の三角ダイアグラムの下方に示した直接体験の部分は筆者が追加したものである。また、三角ダイアグラムの右側の図はすべて筆者が加筆したものである。最右端の博物館の類型中にA, B, C, Dとあるのは媒体の質別に博物館を分類したものであり、野外博物館が直接体験学習に最もふさわしい博物であることを示している。

(E) 新しい地域博物館：Ecomuseum（生活・環境博物館）

野外博物館が突然変異的に進化したものとして位置づけられるものの中にエコミュージアムと呼ばれている博物館がフランスで誕生し、目下壮大な実験が進行中であることを知っている者は意外に少ない。それは我が国だけではなく、当事国フランスにおいても市民権を得ているわけではないらしい。昨年（1988年）9月28日、パリのルーブル美術館内にあるフランス博物館調査研究所長ラーニエ博士（Dr. Christian Lahanier）が来日した際、筆者が直接質問したのに対し、エコミュージアムについて一般的な説明はしてくれたが内容については多くを語ろうとしなかった。またエコミュージアムの一種と考えられるフラグメンテッド・ミュージアム（Fragmented museum）については、その存在すら知られていなかったのである。

しかし、筆者はエコミュージアムについて調べれば調べるほど、それがいかに革新的な博物館であるかを理解することができるのである。エコミュージアムについては章を改めて後述するが、ここでは創始者アンリー・リビエール（Georges Henri Rivi re 元国際博物館会議事務局長）の思想だけについて述べておく。

Ecomuseumという語は1971年Henri Rivi reによって提唱されたEcomuseologyという博物館学に支えられて誕生したEcological museum（生態学博物館）と同義語の博物館名である。すなわち、地域社会の人々の生活と、その自然及び社会環境の発達過程を生態系的立場から歴史的に探究し、自然及び文化遺産を過去から現在にわたって保存し、育成し、展示することを通して、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする全く新しいタイプの野外博物館である。Ecomuseumを直訳すれば生態（保）博物館となるだろうが、筆者は意識して「生活・環境博物館」と呼ぶのがふさわしいと考えている。

Ⅲ．野外博物館研究史

筆者は既に、この論文の中で「野外博物館」という言葉をこともなげに使用している。あたかも読者はこの博物館が何であるかが、よく解っているかのようにである。



第2図：パーク・エコミュージアムの第1号であるフランスのEcomusee de la Grande-Landeの中にあるMaquis House。羊が沢山飼育され生産活動が行われている（After H. Varine 1985）

しかし、この博物館が持つ意味とか広がりということになると博物館界でも共通理解が得られている状況ではない。そもそも、野外博物館は勿論、野外という言葉に相当するダイレクトな英名がないのである。和英大辞典（研究社）で「野外」という言葉をひいてみると、その直訳は無く野原（Field）、屋外（Open-air）と訳してある。従って野原博物館であればField Museum、屋外博物館であればOpen-air Museumと呼ぶことができる。そこで野原も屋外も野外と同じという理論に立った場合、それに対応する言葉は無いのである。筆者は止むを得ず、この論文の英名として野外博物館を「Field Museum and Open Air Museum」としておいた。博物館先進国である欧米にも筆者が考えている野外博物館に対応する言葉はない。筆者が考えている野外博物館とは何かについて述べておこう。

筆者は野外博物館には自然系と人文系の両者が存在するという基本概念に立っている。そして現実には地球上の各地に分布しているのである。しかし、不思議なことにOpen-air Museumについては欧米においても盛んに使用されているが、Field Museumという表現をした博物館もないし言葉すらないのである。それならば欧米で使用されているOpen-air Museumをもって野外博物館の英訳をしたらよいという意見も出てくるが、それはOpen-air Museumの定義の中に自然系野外博物館は含まれていないので、そう簡単にはいかない事情がある。それからOpen-airという言葉には建物の内に対する外という意味があり、人間の行為を外でやる場合は使用されてい

るようである。それに対してFieldと言った場合には、あくまでも地形、地質、その生物相が対象になり、人間の行為の場合にも野生的な行動とか自然を対象とした活動に対して用いられているようである。以上述べた両者の立場を考えると、自然系の野外博物館に対してOpen-air Museumを使用することは出来ないと思うのである。

(1) 野外博物館の提唱者：木場一夫

野外博物館という日本語の名づけ親は誰なのだろう。そこで日本における博物館学の創立者である棚橋源太郎の著書を調べてみたが発見することが出来なかった。棚橋は関連語として「戸外展覧」、「戸外博物館」、「民俗園」、「公園博物館」、「歴史的家屋博物館」、「戸外文化史博物館」、「考古学園」、「偉人記念の家博物館」といった言葉を使用しているが、これらに対応する欧米語はすべてあることから類推すると、これらのすべては欧米語の翻訳語であることがわかる。すなわち、野外博物館と訳すにふさわしい欧米語はその当時も存在していなかったことが解る。

棚橋よりやや遅れて日本の博物館学界に木場一夫が登場する。彼の名著「新しい博物館(1949)」の中に「野外博物館」なる文字を発見した。この著書の第10章、「路傍博物館」の項目の中で彼は次のように述べている「路傍博物館とはアメリカ博物館協会、戸外教育委員会委員長であったDr. Hermon Carey Bumpusによって命名されたもので1921年にヨセミテ溪谷に誕生したのが世界の中の第1号である。そして、路傍博物館(Trailside Museum)は、野外博物館であるということを写実的に暗示している。すなわち、野外博物館の本質的な特徴は、環境が説明されるべき対象を提供していることであり、そこでは自然が地形・地層・野生生物あるいは人類が残した考古学的または歴史的遺跡の展示を供給しているのである。」彼はアメリカの国立公園の中にある路傍博物館(Trailside Museum)に着目し、それを野外博物館として位置づけると共に、自然系のものばかりでなく人文系の戸外博物館(Open-air Museum)も含めて野外博物館とよぶべきであると提唱している。しかし、野外博物館のルーツにはふれられていないので確認はできないが、筆者が文献の上で調べた限りでは「野外博物館」の名づけ親は木場一夫ということになる。

木場一夫の説明の中で、特に重要な指摘は、野外博物館とは自然及び考古・歴史的遺跡そのものが野外における展示として説明できるものでなければならないと言っていることである。従って人為的に展示資料を他所から



第3図：アメリカ オハイオ州クリーブランド市郊外にあるメトロポリタン・パーク内にあるTrailside Museum (路傍博物館)の道標板

集収し移設した施設は野外博物館の対象外のように扱っていることである。仮に彼の頭の中にスカンセンのOpen-air Museumがあり、あの戸外博物館は収集移設型のものであることを知らなかったとすれば彼の誤認かもしれない。筆者は現地保存型も収集展示型も共に野外博物館の範囲に入れるべきであると考えている。

(2) Open Air Museumの定義と誕生

Open Air Museumに対し、棚橋、木場等は戸外博物館または屋外博物館と訳していたが、最近では野外博物館と表現する人も多くなっている。そこでOpen Air Museumとは正確にどのような博物館を対象にしているのかヨーロッパ・オープンエア博物館協会(Association of European Open Air Museum=AEOM)のChairmanであるProf. and Dr. Claus Ahrensの著書の中から定義の項について調べたものを紹介する。

まず、AEOMの役割(規約)の中で「Open Air MuseumはOpen Air(戸外)にある色々なタイプの建物、それは構造的にも、機能的にも意義ある実在物、それはまた、集落、住居、経済及び技術についても正しく説明できる対象物を科学的に収集し展示するところである」と述べている。

1957年AEOMはICOM(国際博物館会議)に対してOpen Air Museumの宣言をした。そして1959年ICOM第5回総会において承認され、国際博物館会議の中で市民権を獲得した。さらに1982年AEOMは次のような原理と目標を発表した。

(A) 文化財及び文化地域にある移動不可能なもの、及び

移動可能な文化遺産を保存する。

- (B) 文化財及び文化地域の科学的調査を実施し記録する。
- (C) 教育に関連して、文化財及び文化空間自体の歴史を一般市民や民俗研究者に対して公開し普及する。

〔定義〕

Open Air Museumとは博物館の敷地（土地）として公表されている地形的環境内に実在物を露出して提供すべく、科学的に計画され、方向づけられ、そして科学的に管理された活動をしている組織体である。

Open Air Museumは科学的、教育的目的を明確にすると共に保全手法を駆使し保護に努めると同時に一般市民に公開する施設である。

Open Air MuseumはICOM規約3条に従い、低俗の好奇心を満足させたり、営利を追求するような施設や経営をしてはならない。

Open Air Museumのために収集された対象物は情報の伝達や教育的に活用される。また、単一のものを見せるのではなくグループとして収集し比較提供することが必要である。

Open Air Museumは歴史的に正確な絵になるように自然的、文化的環境をとり入れた展示を通して、夫々の建造物がお互いに関連しあってみられるようにアレンジすることが望ましい。

Open Air MuseumはOpen Air（戸外）における文化史博物館である。現在あるものの大部分は民族学および民俗学にかかわる博物館である。そして、その中の大部分は伝統的な農家や農村文化遺産を扱っているが、なかには小数であるが町並みを扱っているものもある。また実在物を展示するとなると限界がある。特に先史時代の住居等は科学的に承認されれば再建することもできる。これは、その建物が持つ教育的価値をゆがめるものではない。科学的決定によって高く評価されたものであれば再建、修復、移設等により展示効果をあげることができる。

以上はヨーロッパ・オープンエアー博物館協会の出版した資料に基づくOpen Air Museumの概念である。これでもわかるようにこの博物館は明確に文化史博物館と規定しているので、自然系の野外博物館が、その傘下に入る余地は全くないのである。このことは逆に自然系、人文系の総合野外博物館の英文名として使用することも拒否しているとみるべきである。

(3) 野外博物館に関する国内論文

ここで野外博物館について論じた文献類の中で主要なものについて眼を通しておく。棚橋源太郎及び木場一夫

については前述したので省略する。昭和31年（1956）日本博物館協会から出版された「博物館学入門」の中で筆者は第8章、野外博物館の分野を執筆した。この中で筆者は次のように述べている。「野外博物館は展示施設と展示対象物との位置的相関関係から博物館を分類する場合に名づけられたものである。即ち、いわゆる博物館は建物や展示施設を固定的に建設、作成して、説示のための資料はすべて収集してくる方法をとっているが、野外博物館は、その精神においても、その手法においても全くその逆で、説示資料（展示品）は出来る限り自然環境の中にそのままおき、展示施設の方を移動することによって博物館の展示形態を整えようとするものである。」

この考え方は、当時、木場一夫の思想を強く受けていたもので、自然系の現地保存型野外博物館をイメージ・アップしながら執筆した結果である。従って、この表現では人文系及び収集展示型の野外博物館が欠落しており、いわゆるOpen Air Museumの考え方とは整合していない点において不備が認められる。

筆者は1947～1965年にわたり18年間、秩父自然科学博物館（埼玉県）に勤務するなかで武甲山麓および長瀬の荒川河岸に自然観察路（Nature Trails）を設けて野外展示施設を整備した。長瀬においては博物館自体を路傍博物館（Trail Side Museum）として位置づけ自然系の現地保存型野外博物館を完成した。当時、アメリカの博物館事情に詳しくあった埼玉大学長、遠藤隆次博士（地質学専攻）が来館し「アメリカにもこれだけ立派な野外博物館は無い、まさに世界一だ」と賞賛されたことがある。この時の成果は英語とフランス語の論文にまとめユネスコ（UNESCO）発行の「Museum」Vol.10, No.1（1958）に掲載された。この論文は我が国における野外博物館を国際的に公表した最初の論文だったと思う。

1964年筆者は「学校岩石園（地学園）の計画と設置の研究」と題した論文を博物館研究Vol.37, No.6～7合併号で発表している。動物園や植物園は立派な自然系の収集展示型の野外博物館と考えているが、岩石園には見るべきものが少ない。昭和30年代に入ると高度経済成長の波に乗って学校の教育現場に岩石園ブームが巻き起った。筆者は学校からの求めに応じて岩石園設置の指導に当たったが、その時、「岩石園」とよばれる岩石陳列園の姿を改めて多角的に体験学習の出来る「地学園」への質的向上を目指して設計に協力した。その成果が前述した論文で、動物園、植物園と並んで地学園を野外博物館に仲間入りさせたのである。

1978年、日本博物館協会は「野外博物館総覧」と題す



第4図：分類展示の岩石園の場合には鑑定台を設置して自己評価ができるようにする（新井重三設計，埼玉県秩父市第二中学校の岩石園）



第5図：岩石園は観るだけでなく自己学習が自由に出来るようにハンマーやルーペを備えておく。（新井重三設計，埼玉県長瀬町第一小学校の岩石園）

るかなり厚い報告書を発行した。その中で藤島亥治郎（東大名誉教授）は「野外博物館展示の家」と題する論説を執筆している。彼は序説の中で明確に論文の内容と立場を述べている。要約すると次のようになる①野外博物館は自然的なものと人為的なものに分かれる。そして自然的なものの例として国立公園内の特別地区，ケニアの動物公園，動物園，植物園等をあげている。一方人為的野外博物館の例としてアメリカの都市文化を復元したウィリアムスバーグ，日本の中山道のような街道，風土記の丘，明治村，武家屋敷等をあげている。しかし，各論的記載に当たっては「自然系」，「風土記の丘」，「歴史の道」を除き，専ら生活文化のものに限って説明しているのが特徴である。また，巻末に野外博物館一覧表（日本）を20頁にわたって載せているがその中でも自然

系の博物館は全く取りあげられていないので全体としては生活文化野外博物館の論文とみることができる。

同じく1978年，杉本尚次（国立民族学博物館）は講談社発行の世界の博物館シリーズ，No.14で「フィールドに息づく民家と村落の伝統」と題して世界の野外博物館の紹介記事を書いているがこの野外博物館めぐりの記事も，すべて人文系に限られておるのは題名からみて止むを得ないであろう。この記事は野外博物館を論ずるという立場ではなく，あくまでも国別に野外博物館を案内するという構成になっている。当然のことであるが日本の野外博物館にも言及し，日本民家集落博物館，日本民家園，飛騨民俗村，明治村，江戸村，四国村それに風土記の丘，町並み保存の例などがとりあげられ簡単な説明が加えられている。

1980年，杉本尚次は国立民俗学博物館研究報告第5巻2号に「ヨーロッパ民家の民族学的・地理学的研究－野外博物館の民家を中心として－」と題する論文を寄せている。第2章でヨーロッパの野外博物館についてヨーロッパの民家を中心とした野外博物館について68頁に亘って詳述している。この論文もタイトルの性格からも解るように野外博物館の中でも，ごく限られた狭い範囲の民家のみ焦点を合わせているので野外博物館の全体像をつかむことは不可能である。筆者が前述したOpen Air Museumの全容を知る上では極めて価値の高い論文と言えるであろう。

1982年，長谷川栄（東京国立博物館）は彼の著書「これからの美術館」の中で「完成した野外彫刻美術館」と題して彫刻の森美術館（箱根），美ヶ原高原美術館（長野県）等を美術系の野外博物館と位置づけて論評している。



第6図：ヨーロッパで最も大きく美しいと言われている。収集展示型野外博物館 Den Gamle By（古い町屋），オーフス市，デンマーク

1983年、筆者は千葉市教育委員会から依頼されて千葉市内の史跡整備計画に参加する機会を得た。協議の結果、野外博物館構想が浮上し、自然と人文が結びついた総合野外博物館として史跡を整備することが望ましいと答申した。その時提出した報告書が、千葉市教育委員会発行の新井重三著「野外博物館と総合博物館について」である。

1984年、文化財保存計画協会は機関紙コンセルボ（Konservo）のNo. 6で「野外博物館特集号」を組み筆者は全面的協力を依頼された。この中では野外博物館の定義、野外博物館の分類、野外博物館の事例等がまとめられている。その他広瀬鎮著「モンキーセンターと野外博物館活動」のほか、文化財保存計画協会が設計・施行した野外博物館・久保泉丸山遺跡、それに東野外志男著「石川県白山自然保護センターの野外博物館構想と活動」、稲田光明著「北海道ポー川史跡自然公園」、それに筆者の「アメリカ、オハイオ州エリー湖畔に位置するクリーブランド市の「エメラルド・ネックレス」等の記事が載っている。

編集に当たっては、努めて自然系と人文系の野外博物館をとりあげたのは野外博物館に対する偏見や誤解を取り除くことを意図的に計画したことによるものである。

1985年、千葉市教育委員会は「千葉市史跡整備基本計画」を刊行した。その中で筆者は「野外博物館と野外展示」と題して野外博物館構想を発表している。論旨は2点あり、その第1は加曽利貝塚は縄文時代の人々の生活を知る上で重要な遺跡であるが、その遺跡だけ残すことは全く意味がない、台地の上の生活と貝塚を理解するためには台地を開析している谷（かつて海が入っていた入江）を同時に保存しなければ貝塚を正しく理解することはできないという理論である。すなわち、歴史遺産だけ残すのではなく自然遺産も同時に保全することが野外博物館設置にとって重要であると指摘した。第2は史跡や遺跡をネットワーク状に結ぶ構想である。現在の加曽利貝塚博物館は立派な現地保存型の野外博物館である。この博物館を中核館（Core Museum）として他の衛星的遺跡（Satellite Heritage）を相互に結ぶ回廊をつくる構想である。点から面への拡大こそ野外博物館の生命であるという思想を打ち出した。

同じく、この報告書の中で佐々木朝登（丹青総合研究所）は「野外博物館整備の方法」と題して具体的、かつ技術的な立場から次のような項目に関して記述している。
①目標植生の復元②縄文体験の場、③発掘演示等。特に加曽利貝塚地域については「縄文の森」の復元構想を提唱している。

1986年、杉本尚次は再び「ヨーロッパの野外博物館」について民族学的・地理学的立場からの考察を行っている。この論文の中でも自然系の野外博物館には全くふれず、次のように書き出している。「野外博物館は、主として伝統的建築物や生活用具類などをセットにして野外に配置展示しており、民家をはじめとする伝統的庶民文化財保存の重要な手段の一つになっている」と述べ文化野外博物館の中でも収集展示型のOpen Air Museumのみにとらわれて現地保存型のSite Museumには関心が拂われていないくらいが濃厚であると言える。その証拠に彼はさらに次のように述べている。「野外博物館という用語はイギリスのOpen Air Museum、ドイツのFreilicht Museum、フランスのMusée de Plein AirあるいはEcomuséeに相当する。」ここで述べているEcomuséeは確かに野外博物館の一種であることには間違いないが、いわゆるスカンセン型のOpen Air Museum、言い換えれば収集展示型ではなく、現地保存型に属し、創始者であるアンリー・リビエルが自ら言っているように全く新しい博物館学（Ecomuseology）の理論に基づく野外博物館であることを附言しておく。

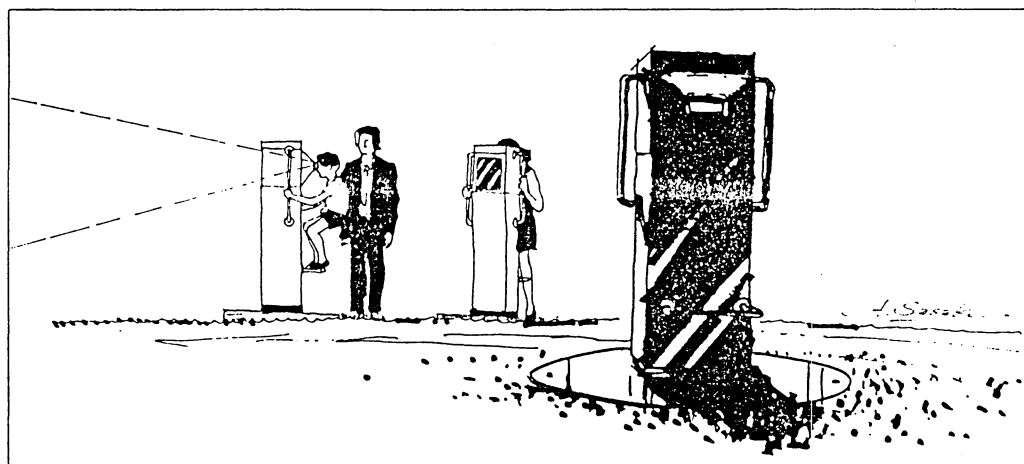
杉本は、この論文の第3章で野外博物館の分類を試みている。それによると次のようになる。

(A) 地理学的・民族学的分類

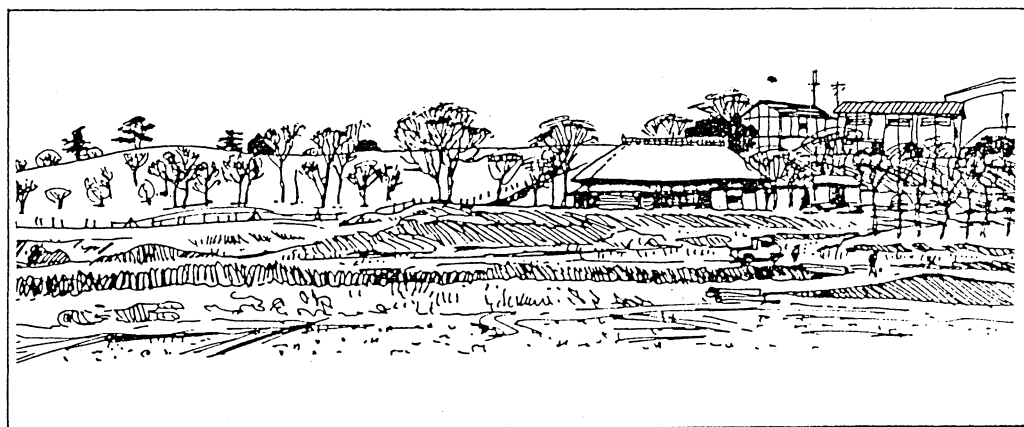
- (a) 中央野外博物館：全国の伝統的庶民文化を通観し比較できるもの。
- (b) 大地域野外博物館：幾つかの地域を含んだ民俗文化地域などの民家等を集めたもの。
- (c) 地域野外博物館：各地方の中小の野外博物館をいう。
- (d) ローカル野外博物館：村や町の単位で建築物を保存している野外博物館。

(B) 展示テーマによる分類

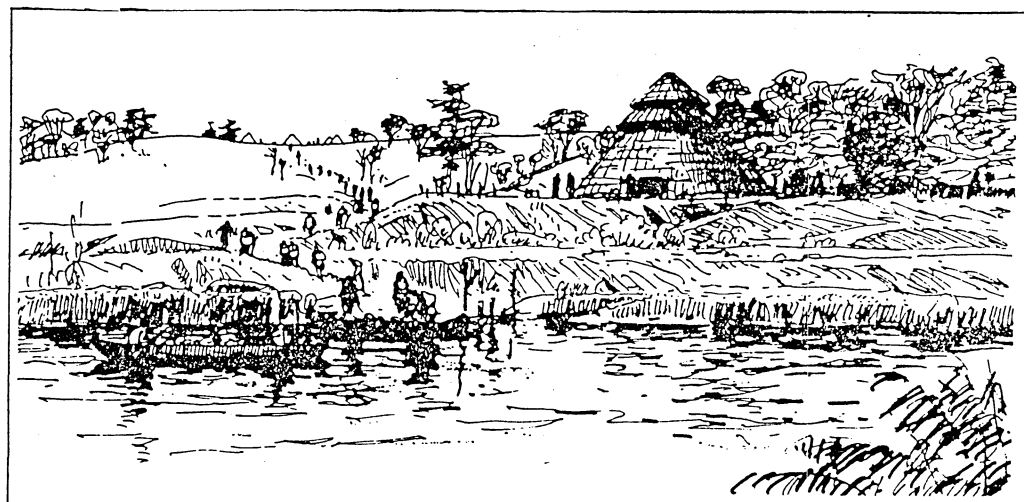
- (a) 総合的野外博物館：建造物に加えて動物園や遊園地までとり入れたスカンセン型のもの。
- (b) 農家などを中心とした民俗建築や村落ぐるみの復元等で村落野外博物館をさす。
- (c) 地方の町の住居を集めて小町並と再構成した町屋の野外博物館。
- (d) 農村の手工業など、伝統的技術に主力をおいた伝統技術野外博物館。
- (e) 土地の耕作、栽培、牧牛など生産関係の野外博物館。
- (f) 産業革命初期の建物やその後の変化などを扱った



(1) ビュースタンドの見取図と使用している訪問者



(2) 肉眼で見た野外博物館の風景（加曽利貝塚附近）



(3) ビュースタンドを使用して見た(2)の場所の縄文時代のような（加曽利貝塚附近）

第7図：野外博物館の現地に設置を提案しているビュースタンドとその効果図（佐々木朝登・画）

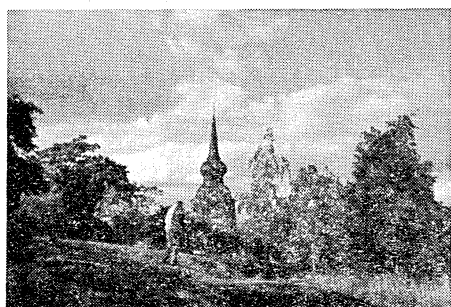


図8：収集展示型野外博物館のパイオニアであるスカンセン（Skansen），ストックホルム郊外のジュール・ゴードン島にある。

産業遺跡野外博物館。

(g) 考古学に主力をおいている先史考古野外博物館。

なお、杉本は野外博物館の構成要素として、立地環境（自然環境）、移築復元、建築物内外での生活用具類の展示、生活の再現（実演展示）、展示館、研究部門と展示、売店、食堂、ガイド・サービスなどをあげて夫々について説明している。

この論文は、かなり豊富なデータを駆使した力作であるが野外博物館を民族学（民俗学）的視点だけからとらえていること。それにヨーロッパに限った展開でありアメリカ大陸の資料が含まれていないので野外博物館の全体像を把握することは出来ない。

筆者は杉本も指摘（1986）しているフランスにおいて開発されたEcomuseum（1971）に興味と関心をもち、野外博物館の再編成を思い立ち、1987年、丹青総合研究所の機関紙「文化空間研究」に「野外博物館総説（試案）」を発表した。そして野外博物館を大きく現地保存型野外博物館と収集展示型野外博物館に大別すると共に前2者の博物館を夫々総合博物館、自然系野外博物館、人文系野外博物館の体系に整理して試案を発表した。杉本が述べている野外博物館は筆者の体系的分類に従えば収集展示型野外博物館の中の人文系野外博物館に位置し、いわゆるOpen Air Museum に該当するものである。そしてEcomuseumは現地保存型野外博物館の自然と人文の総合野外博物館として位置づけた。これに関する内容は章を改めて詳しく後述する。

同じく1987年には筆者は丹青総合研究所の機関紙「Gazette」の2巻3号で「Ecomuseum」について発表すると共に、さらに1987年10月「丹青」7巻10号で「エコミ

ュージウムとその思想」を発表した。また明けて1988年には「ミュージアム・データ（Museum Data）」に「野外博物館に突然変異：エコミュージアム」なる論文を投稿してエコミュージアムの思想、定義、機能、活動と世界の動き等について紹介した。その内容は後述する。

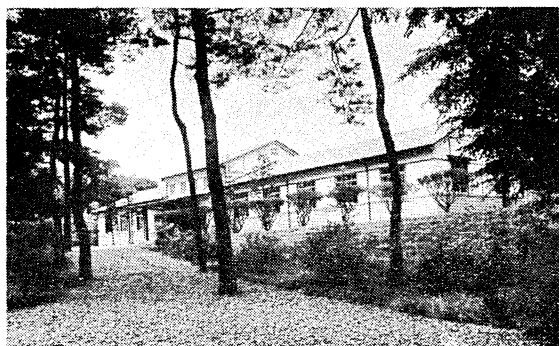
(C) Field Museum（フィールド・ミュージアム）構想

筆者が野外博物館を分類するに当たって最も苦心したのは野外博物館を総称する英文名もさることながら、自然系の野外博物館の英文名であった。国内では勿論のこと、外国でも、それに該当する言葉は見当たらないのである。関連用語としてはWildlife Refuges, Bird Sanctuaries, Environmental Center, Trailside Museum, Living MuseumなどがあるがField Museumという名称は出て来ないのである。筆者は日本製の英名になることを覚悟してField Museumなる用語を使用することを決めた矢先のことである。1988年、月刊「グリーンビジネス」なる雑誌にフィールド・ミュージアムなる言葉を発見し、勇気づけられた。それと相前後して1988年科学技術庁資源調査会の刊行になる「科学技術庁資源調査会報告」109号に「フィールド・ミュージアムの展開の推進」と題する論文が掲載された。それによると次のように表現されている。

「フィールド・ミュージアムとは、人間とみどり資源との触れ合いを助け、躍進することにより、人とみどり資源とのかかわりを総合的に理解するための施設機能である。フィールド・ミュージアムの展開とは、みどり資源の文化財としての利用を進めるために必要な利用プログラム、指導員の配置、利用アクセス等の充実をはかることである。」

博物館界からの提案に先がけて、思わぬところからフィールド・ミュージアムという英文名が出てきたことは、いささか意想外であるが、機は熟していたとみるべきであろう。定義には、いささか不満があるが、筆者は強力なよりどころを得た感を禁じ得なかった。筆者は、あらためて、現地保存型野外博物館の中の自然系野外博物館の英文名としてField Museumなる呼び名を提案するのである。

以上が野外博物館の研究史である。Open Air Museumとして世界で最初に開設されたのが1891年、スウェーデンのストックホルムの郊外にあるスカンセンである。我が国では1960年大阪府豊中市の日本民家集落博物館が最初の野外博物館と言われている。自然系のいわゆるField Museumとしては1958年埼玉県秩父で筆者等が開



第9図：1950年代の秩父自然科学博物館（Trailside Museum）

設した秩父自然科学博物館（現在の埼玉県立自然史博物館）のNature Trail（自然観察路）とTrailside Museum（路傍博物館）が草分けということになるのであろう。

Ⅳ．野外博物館の体系と分類

伝統的な博物館の概念（Principle）や体系（System）を支えているものとして資料の収集という行為が不可欠のように考えられている。たしかに、建物を主体とした博物館にあっては至極当然のことであるが、よく考えてみると建物博物館にあっては収集という行為は手段であって目的ではない。目的は保存とか展示であることに気付くであろう。従って本質的に考えれば現地での保存が可能であれば、あえて収集する必要はないし、現地で展示できれば、それに越したことはないという理論も成り立つ。現地で保存し、現地で環境と共に展示する博物館があっても差しつかえない筈である。その場合には保存科学的な手法を十分駆使して資料を保全したり、育成したりすると共に展示技法も室内展示に準じて工夫をすることが必要である。見方を変えてみれば収集して一ヶ所に集めるのは保存するための止むを得ない手段であるとも言える。

愛知県犬山の明治村は我が国で最も著名な野外博物館（Open Air Museum）である。この種の博物館の場合は前者の考え方とは異なり、収集という行為から出発している。巨大な建造物を保存・展示する目的であるが、建物博物館の中には大きすぎて入れることが出来ない。止むを得ず野外に展示していると見ることができる。この場合には、資料が建物の中にあるか外にあるかのちがいでこそあれプリンシプルでは建物博物館と同じ概念でとらえることができる。その共通点は収集して保存・展示するという点である。



第10図：武甲山麓自然観察コース（Nature Trails）に設置された説示板

以上述べたことから解るように野外博物館の体系を考える場合には、その基準として収集を前提として成り立つ博物館と、あくまでも資料を動かすことなく現地で保存・展示するタイプの博物館に分かれるということである。

そこで筆者は、まず現地保存型の野外博物館と収集展示型の野外博物館に大別する。この両者は博物館のプリンシプルから見て基本的な相違がある。前者は資料収集を前提としないという点において博物館法の第2条の定義になじまないし、伝統的博物館学（Museology）から逸脱するとも言えるだろう。

一般的に博物館を分類する場合には当該博物館が扱う資料を基準にする。博物館で言う自然系博物館、人文系博物館とそれらを統合した総合博物館が好例である。そこで筆者は第2段階としての基準を採用した。それが自然・人文総合野外博物館、自然系野外博物館、人文系野外博物館である。そして、さらに館種別博物館に相当するものとして現実に存在する博物館名または共通する概念でまとめた館名を挿入した。この分類表は別表で示したとおりである。なお、諸外国の資料や事例も参考にしたので以下和英対訳表と事例を記載する。

現 地 保 存 型 野 外 博 物 館	自然・人文総合野外博物館 生活・環境博物館 (Ecomuseum)		地域住民の伝統的な生活を環境と共に保存・育成・発展させるもの
	自然系 Field Museum 野外博物館	自然系総合野外博物館 General Field Museum	自然遺産を総合的に現地で保護・育成し、公開しているもの
		野生生物保護センター Wild Life Refuge Center	野生生物の保護・育成を目的とするものでアフリカ国立公園に多い
		天然記念物博物館 Natural Monument Museum	地質・生物等の貴重な自然遺産を保全し、展示・公開しているもの
	人文系 Site Museum 野外博物館	人文系総合野外博物館 Heritage Park Museum	現地で文化遺産を総合的に保存・修復し、展示・公開しているもの
		史跡・遺跡博物館 Historic Site Museum	史跡・遺跡・城郭・家屋・町並みなどを現地で保存・公開するもの
		産業遺産博物館 Industrial Heritage Museum	生産工場・鉱山・坑道等の産業遺産を保存・修復し、公開するもの
収 集 展 示 型 野 外 博 物 館	自然・人文総合野外博物館 General Outdoor Museum Combined with Nature and Culture		自然及び文化遺産を各地から収集し、それを野外に移設・復元・展示し、公開しているもの
	自然系 Outdoor Museum 野外博物館	自然系総合野外博物館 General Outdoor Museum	自然を構成する岩石、鉱物、動植物などを野外で展示公開するもの
		動物園、植物園、水族園 Zoological Garden, Botanical Garden and Aquarium	各種の動・植物、魚類などを収集し、生きているものを野外で飼育・栽培し、公開しているもの
		地学園・岩石園 Geological Garden, Rock Garden	岩石の種類や、その産状が理解できるように野外に展示したもの
	人文系 Open-air Museum 野外博物館	人文系総合野外博物館 General Open-air Museum	各種の建築物や美術・彫刻作品等を野外で展示・公開するもの
		建築物等移設・復元博物館 Open-air Museum	各地から建築物資料等を収集し、移設・復元して展示公開するもの
		彫刻野外展示博物館 Sculpture Park Museum	自然環境の豊かな野外の芝生に彫刻作品を展示している野外美術館

第1表：野外博物館の分類表 新井重三（1989）

野外博物館 和英対訳表と事例

(1) 現地保存型野外博物館(Museum for Conservation on the Actual Place)

(A) 自然・人文総合野外博物館(General Museum Combined with Field and Site Museum)

Ecomuseum(生活・環境博物館)

(B) 自然系野外博物館(Field Museum)

(a) 自然系総合野外博物館(General Field Museum)

National Park(国立公園), National Park Museum(国立公園博物館), Environmental Museum(環境博物館), Trailside Museum(路傍博物館), Nature Trails(自然観察路), Nature Refuge Center(自然保護センター)

(b) 野生生物保護センター(Wild Life Refuge Center)

Wild Life Sanctuary(野生生物の聖域), Bird Sanctuary(野鳥の聖域), Forest Conservation Center(森林保護センター), Submarine Park(海中自然公園)

(c) 天然記念物博物館(Natural Monument Museum)

Petrified Forest National Monument Visitor Center(化石の森天然記念物ビジターセンター), Dinosaurs National Monument Visitor Center(恐竜天然記念物ビジターセンター)

(C) 人文系野外博物館(Site Museum)

(a) 人文系総合野外博物館(Heritage Park Museum)

Old Town Museum(古い町並み博物館), Heritage Village(文化遺産の村)

(b) 史跡・遺跡博物館(Historic Site Museum)

Archaeological Site Museum(考古遺跡博物館), Historic Art Site(歴史芸術遺跡), Folklore Site Museum(民俗史跡博物館), Historic House Museum(偉人の家博物館), Castle Site Museum(古城跡博物館)

(c) 産業遺産博物館(Industrial Heritage Museum)

Industrial Heritage Site(生産工場遺跡博物館), Fishing Heritage Trail(漁業遺跡見学路), Museum of Mining(鉱山博物館), Stone Center(採石場センター), Stone Quarry Museum(採石現地博物館)

(2) 収集・展示型野外博物館(Museum for Collection and Exhibit on in the Open-air)

(A) 自然・人文総合野外博物館(General Outdoor Museum of Nature and Culture)

Skansen Open-air Museum(スカンセン野外博物館)

(B) 自然系野外博物館(Outdoor Museum)

(a) 自然総合野外博物館(General Outdoor Museum)

Nature Trails Garden(自然観察園)

(b) 動植物公園, 水族館(Zoological and Botanical Garden, Aquarium)

Zoological Garden and Park(動物園・公園), Botanical Garden(植物園), Arboretum(樹木園)

(c) 地学園・岩石園(Geological Garden, Rock Garden)

Geological Garden(地学園), Rock Garden(岩石園)

(C) 人文系野外博物館(Open-air Museum)

(a) 人文系総合野外博物館(General Open-air Museum)

Open-air Museum(人文系の移設野外博物館の総称)

(b) 野外移設・復元博物館(Open-air Museum)

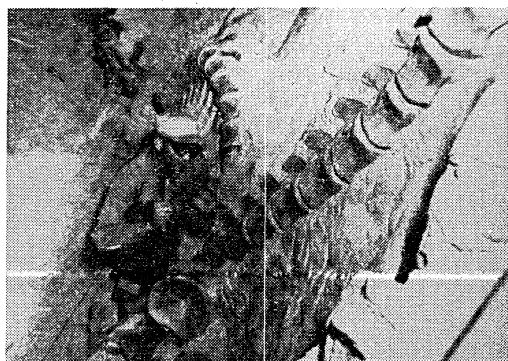
Memorial House Museum(記念建築物移築博物館), Heritage Village(古い村移築博物館), Old Town Museum(町並み移築博物館), Folk Village(民俗村移築博物館)

(c) 彫刻野外展示博物館(Sculpture Park Museum)

Sculpture Park(彫刻公園野外博物館)

V. 野外博物館の現状と動向

日本博物館協会の調査によると1988年3月現在の我が国の博物館総数は2,577館に達しているという。館種別統



第11図: 代表的な自然系の現地保存型野外博物館, この博物館では恐竜化石の発掘作業も見学することができる。(アメリカ, ユタ州の恐竜国立天然記念物公園内にある自然史野外博物館, Field House of Natural History)

計が示されているが野外博物館という枠は設けられていないので、その数は知るよしもないが動物園79, 水族館59, 植物園67, 動水植の総合園が19となっている水族館のすべてが野外博物館に入れられるかどうか問題であるので一応除いて計算すると動植物園の総数が165園ということになる。野外博物館の主流を占める人文系野外博物館と現地保存型の自然系博物館の正確な数は現段階では不明であるが、かなりの数にのぼっていることであろう。前述した動植物園は筆者の分類によれば収集展示型野外博物館の中の自然系野外博物館に属するものである。杉本尚次（1986）の論文に出てくるヨーロッパ22ヶ国の文化史野外博物館数（Czajkowski 1984）は2,041館となっているから野外博物館については日本はまだ後進国かも知れない。

博物館はその国（地域）の文化のバロメーターと言われるが、館の種類はその国（地域）の国情なり価値感を反映する鏡と見ることができる。我が国の場合、野外博物館は博物館界で大きな勢力になってはいない。市民権を得ていないとも言える。それは前述した統計枠にも出ていないことから解るのである。しかし、近い将来野外博物館は大きな勢力になることを筆者は最近の動向から察知している。

(1) 野外博物館誕生の背景

博物館は大きな時代の流れの中で地域に根をおろして誕生する。そしてどのような博物館をつくるかは、その時代、その地域の事情によって決まる。それが博物館誕生の動機とか背景ということになる。

明治の初期、日本に国立の博物館が設立された背景には殖産興業という明治政府の近代国家成立のための博覧会の遺産として生まれたと言われている。大正から昭和初期にかけての流れとしては日本の富国強兵政策は愛国心の高揚を国民に要求する風潮を生み、その手始めとして郷土愛の振興を考えた。その結果、ドイツのハイマート・ミュージアム（郷土博物館）を導入し、政府は補助金を支給して各府県に郷土博物館の設置をうながした。

第二次大戦前は常に国（政府）主導型で民間の博物館は影の形に沿う如くの状態であったが、戦後は両者の数も加速度的に急上昇し、その背景も異なって来た。戦後の傾向としては高度経済成長に裏づけられて文化国家の担い手的な時代思潮が国や自治体に誘い水をかけたとみることができる。また、一方では明治100年記念とか創立何年記念という記念事業的イベント博物館が爆発的に博物館を増加させたことも事実である。これらはすべて



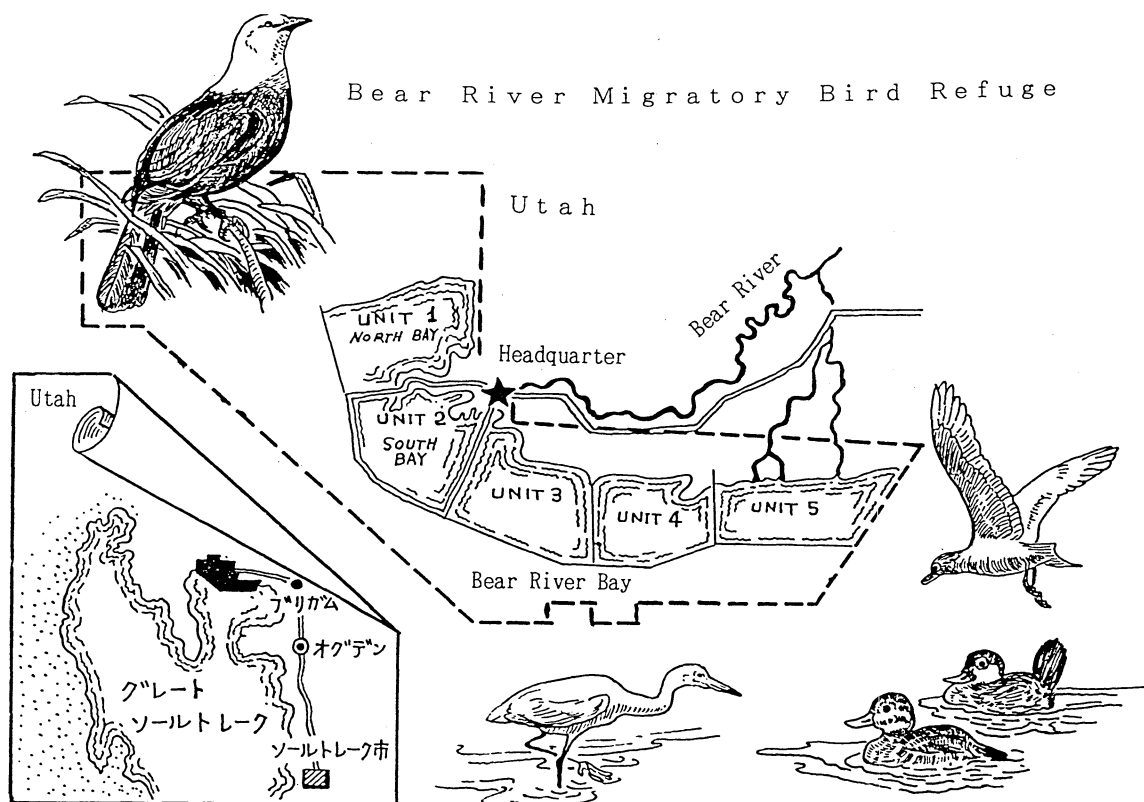
第12図：日本における収集展示型の人文系野外博物館のパイオニア、日本民家集落博物館（大阪、豊中市）

経済大国日本の象徴であることは、最近、企業博物館が彗星の如く出現し、丹青総合研究所の資料によると1987年6月現在の総数は285館そのうち最近の10年間に生まれた数が222館という。なんと80%弱は会社創業〇〇年記念事業として創立された社業製品展示館なのである。企業の中には社業とは全く関係のない美術品を購入している美術館を持っているものも多く、金余りニッポンの美術品財テクなどとうわさされている。

このような時代背景の中にあって、我が国の野外博物館設置の背景は何であろうか。そして真のねらいはどんなところにあるのであるかを考えてみたい。

(A) 収集展示型野外博物館の背景

収集展示型野外博物館は、いわゆる伝統的博物館のプリンシプル、すなわち従来の博物館学で処理できる博物館の一種と見做すことができる博物館である。筆者がこの論文で提案した野外博物館の分類によれば自然系野外博物館と人文系野外博物館に区分される。自然系野外博物館にあっては生物を扱う動植物園や水族園それに地学園、岩石園が含まれる。我が国最初の動物園として開設された上野動物園は明治15年（1882年）に創設されているし、東京大学理学部附属植物園は明治8年（1875年）に小石川植物園として公開されているから、いずれも100年以上の歴史をもっている点において建物博物館と大差はない。人文系野外博物館の中で建築物移設・復元博物館は、そのはしりが昭和35年（1960）に開館された日本民家集落博物館だから自然系に比較すれば、かなり遅い発足ということになる。その総数は杉本（1986）の資料によると24館であるので動植物園の165園に比べるとかなりの開きがある。移築（収集）した民家集落的野外博



第13図：アメリカのユタ州，グレート・ソールトレークの北端，ベア川河口にある渡り鳥保護区（新井重三リライト）

物館の主なものあげると北海道開拓の村，みちのく民俗村，福島市民家園，北方文化博物館民家集落，日本民家園，三溪園，富山市民俗民芸村，金沢市江戸村，飛騨民俗村，明治村，リトルワールド人間博物館，日本民家集落博物館，高松市四国村，熊本県菊水町民家村，沖縄郷土村等をあげることができる。なお，上記のもの外にも営利を目的とした「村」と銘打った類似施設が各地にあるが，それは正当な博物館とは言い難い。ヨーロッパOpen Air Museum協会（AEOM）の規約のなかにも「ICOM規約第3条に従って，Open Air Museum（建築物移設・復元博物館）の目的が他の伝統的博物館以上に低俗的な好奇心を満足させたり，経済的利益を追求するものであってはならない」と述べて，ややもすると低俗化する傾向に流れることを戒めている。

(B) 現地保存型野外博物館の背景

現地保存型の野外博物館は原則的には収集という行為を否定するところから発想している点において収集展示型とは原点において相違するものである。そのことは同

時に伝統的な建物博物館とも相容れない立場にあると言える。この博物館は自然保護とか文化財保護の思想や運動と深いかわりを持っているという背景がある。自然遺産（Natural Heritage）や文化遺産（Cultural Heritage）を，いかにして人間の乱開発から保護するかという課題の産物として生まれた「護りの博物館」とみることができる。従って，護る手法やアプローチがかなり多岐にわたるため，博物館という名称を使っていない施設もある。Natural Park（自然公園），Nature Trails（自然観察路），Nature Refuge Center（自然保護センター），Wild Life Sanctuary（野生生物の聖域），Bird Sanctuary（野鳥の聖域），Forest Conservation Center（森林保護センター），National Monument Visitor Center（天然記念物ビジター・センター）等は自然系それに人文系で，Old Town（町並み），Heritage Park（遺跡公園），Historic Site（史跡），Folklore Site（民俗史跡），Historic House（偉人の家），Castle Site（古城跡），Industrial Heritage Site（工場遺跡），Fishing Heritage Trail（漁業遺跡見学路），Stone Center（採



第14図：千葉県立「房総のむら」（収集展示型野外博物館）



第15図：秋田県角館の武家屋敷（現地保存型野外博物館）

石場センター），それにアメリカに多くみられる Mounds Park（塚，とりで跡地公園）等をあげることができる。これらの遺産が博物館的な機能を持って活動しているものに対しては ICOM 憲章に基づいて博物館と認められている。

これらの博物館は「もの」の保存と同時に環境の保全も兼ねているので収集展示型野外博物館よりもはるかに広い敷地を持っているのが特徴である。古いタイプの動物園は動物虐待園と言われたり，動物園は必要悪とささやかれた。上野動物園も限界にきたため多摩に 28,400^m² の丘陵地を入手して多摩動物公園を開設（1958 年）したが所詮は収集展示型である。先般，園内バスに乗ってライオン園をみたが傷だらけのライオン達には百獣の王の貫録は見られず，みじめにさえ映った。現地保存型のケニヤやタンザニアの国立公園の草原を悠々と闊歩しているライオンの生態は残念ながら観察することは出来ない。

筆者は先般，秋田県角館町の武家屋敷街を訪ねて深い感動をおぼえた。その直後，千葉県栄町に最近開園した「県立房総のむら」（収集展示型野外博物館）を訪ねて佐倉藩の武家屋敷を復元新築した建物を見学したが両者を比較して歴史の歩みの差を痛感した。すなわち，収集展示型の博物館は自然系も人文系も共に疑似体験（間接体験）であり，現地保存型こそ実体験（直接体験）であると思う。

以上述べてきたことから解るように，現地保存型の野外博物館こそ野外博物館の理想であり本領であると思うのである。我が国は人口に対して国土が狭小のため開発か保存かをめぐってトラブルが絶えず，そのたびごとに保護派は守勢に立たされている。その中であって貴重な遺産を護ることは至難ではあるが，先祖からの預りものである遺産を子孫に贈るためにも現地保存型博物館の発展

を願うものである。

（C）護りから攻めてへ転換、フィールド・ミュージアム，エコミュージアム成るか

この論文でも冒頭でふれたとおり，博物館界の風向きに変化が生じてきた。そのひとつは，かたくなに遺産を保護するという立場とは別に遺産を有効に活用しようという潮流である。現在，地域（地方）が直面している過疎化や経済構造の変革から来る不況対策の一環として地域の潜在的個性や特色を掘り起こして売ろうとするいわゆる「村おこし」「町づくり」に野外博物館は格好のプロジェクトになるという構想である。それから他の新しい風は地域における生涯学習の場として伝統的博物館よりも，はるかに有効であるとみることができるからである。この追い風の中で目下進められているのが前述したフィールド・ミュージアムとエコミュージアムということになる。両者共に我が国では，なじみのない名前であるが，実態においては，その基盤はかなり醸成されており近々誕生することは間違いない。その多くは現地保存型博物館であることは吉報と言ってよいであろう。

そこで現在，構想中の現地保存型の例をいくつかあげてみよう。

（a）滋賀県教育委員会の歴史公園野外博物館

近江風土記の丘の再整備計画の中で構想されているもので安土町（城下町，安土山，中世史），能登川町（水郷，条里景観，麻布の町），五個荘町（近江商人の故郷，湧水，条理景観）と 3 町合わせた文化園を，そのまま野外博物館にしようとするもので，その中には城郭研究所，地域博物館，それに風土記の丘公園も設置しようとするものである。総面積 6.4^{ha}。

(b) 愛媛県内子の町並み保存構想

内子町役場内に「町並み保存対策室」が設けられ1982年国の重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けた八日市、護国地区の町並み650 m、面積3.5 ha、その中の伝統的家屋75棟とそれに関連する50点の記念物を保存し公開しようとするものである。

(c) 北海道白老町屋根のない博物館計画

白老町では1985年、地域の恵まれた自然と文化的資源に着目し、これを生かした新しい町づくりを検討した結果、白老町全体を野外博物館(環境博物館)としてとらえようとする計画である。自然遺産としてはホロホロ山、白老岳、樽前山と汗川、滝、砂浜、湿原等の景観が対象となる。文化遺産の中には縄文遺跡、アイヌ文化と伝承、仙台藩白老元陣屋敷跡等の史跡が含まれ、さらに産業・生活施設としてサラブレッド牧場、和牛牧場、サケ・マス孵化場、漁港、製紙工場、温泉なども対象となっている。この計画は自然と人文を総合したものであるが、さらに現在、生産活動を行っている工場や牧場さらには生活の場でもある漁港までも含めるという点において画期的なプランであり、筆者がこれから述べようとするエコミュージアムに酷似していると言わなければならない。

(d) 山形市まちづくり博物館構想

山形市第5次総合計画の8大プロジェクトのひとつとして進められているもので山形市全体をひとつの博物館とみだてて整備しようとする壮大なプロジェクトである。市内にある施設や文化財、史跡、景観などを博物館の展示品として位置づけ、夫々の展示物をネットワークで結び観光客に回遊してもらうというシナリオである。利用者は展示品を通して、まちづくりを学習し、地域振興に役立てようとするところにひとつのねらいがあるようだ。既に市内から822点の展示物の推薦が入っているとのことである。

(e) 千葉市の野外博物館拡大構想

千葉市には我が国最大の加曽利貝塚があり、1969年には貝塚保存と研究を中心テーマに据えた加曽利貝塚博物館が設置され、代表的な現地保存型野外博物館が設置された。その後1979年史跡整備基本構想策定委員会が組織され1985年まで7年間に互って協議と実地踏査が行われた結果、千葉市全域に分布する史跡、遺跡を自然環境と共に残し、加曽利貝塚博物館を本部とする野外博物館にすることが望ましいという結論に到達した。筆者もこの委員会に委員として参加したことを附記しておく。

(f) 東京都板橋区の「まちは博物館」

板橋区教育委員会発行の「まち博だより」3号(1989

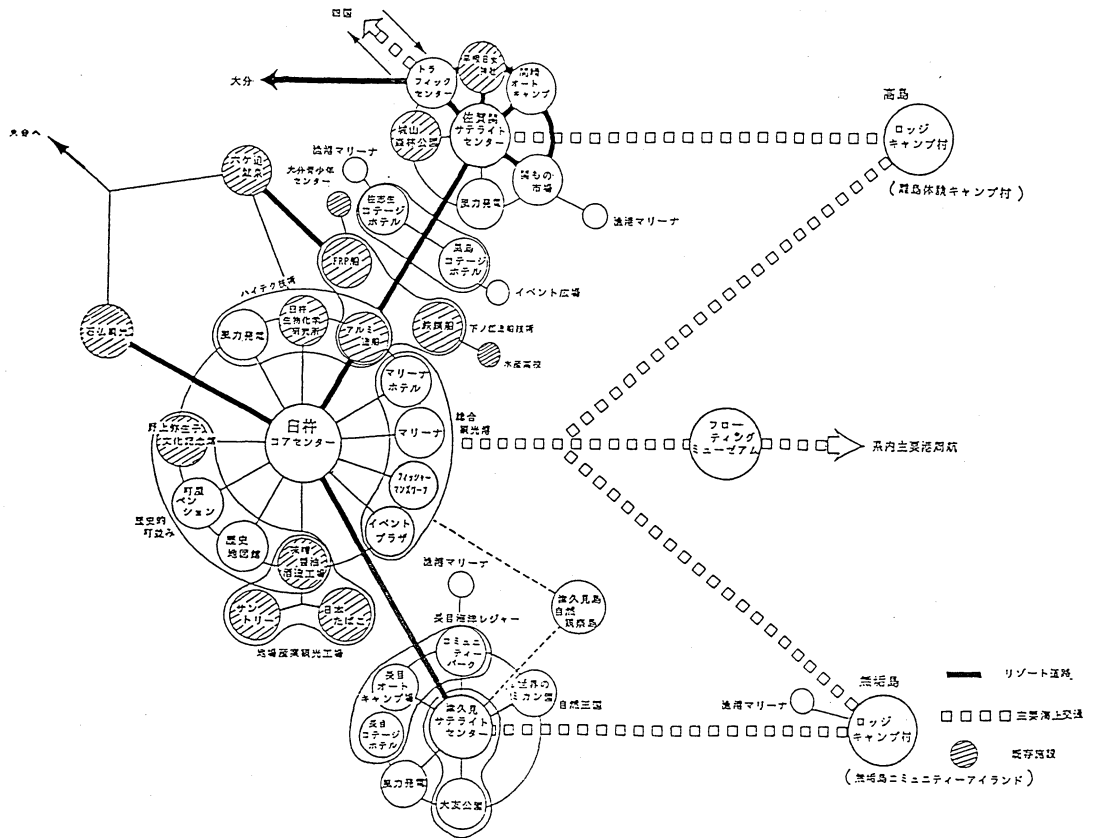
年3月号)によると「まちづくり」は自分の足もとの地域を見直し、そこから地域の特性をひき出し、これを広い未来的視野に立てて伸ばし育てることである。そして、快適環境の創造を目指したものでなければならないと同時に歴史的な風土を保存し、再生させる「まちづくり」が要請されると記している。

(g) 緑の森野外博物館構想(埼玉県自然保護課)

埼玉県では目下、東京都との県境にある狭山丘陵(3,000 haのうち65 haの山林を自然まるごと「緑の森野外博物館」として保存しようとする計画を進めている。この地域は主都圏内に残された貴重な自然遺産で林相はコナラ、スギ、ヒノキでその林の中にキツネ、タヌキ等の野生哺乳動物13種それにタカ類、水鳥類の鳥類約200種が生活しているという。これらの動物達にすみよい環境を残してやろうというのが県のねらいであるが、園内には案内板、名札等をつけた自然観察路を設けて利用者にも開放するという。

(h) 山梨県都留市のフィールド・ミュージアム(ムリネモ協議会)

山梨県都留市で画期的な野外博物館が進行中であることはかねてから知っていたが先般はからずも現地を訪ねる機会を得た。現地では既にフィールド・ミュージアムという名称を堂々と使っているので、これが我が国最初のフィールド・ミュージアムになるかもしれない。このミュージアムの推進力になっているのは都留文科大学の学生を中心として組織されている「ムリネモ協議会」である。都留市とは言っても人口5万人にも満たない丹沢御坂、秩父の3山系にはさまれた谷間の小さな大学町である。里山はいま利用価値を失い、放棄された二次林はムササビ、リス、ネズミ、モグラの別天地となっている。この動物達の頭文字をとったのが「ムリネモ」ということだとは現地に入って始めて知った。協議会の若者達はこれらの野生動物との出会いを楽しむ場すなわちフィールドにしたいという念願から思い立ったという純粋な情熱に強く心を打たれた。彼等は既に活発な行動を開始しており都留市全域を各地区に分けて各地区ごとに具体的な動物との出会いの広場を作っている。なかでもムササビタワーとかネズミの観察小屋などは、その着想といい、その施設といい、眼をみはるものばかりであった。このプロジェクトの背景には動物学の研究者としても優れた、博物館の学芸員としても豊かな経験を持っている都留文科大学の教授、今泉吉晴博士の卓見と指導力がこの花を咲かせていることを附記しておく。この捨て去られたかに見える山里も東京まで1時間という距離にあることが



第16図：大分県杵臼市文化圏のエコミュージアム構想によるコアとサテライトの関係を示す全体システム
(1988, 地域設計研究所株式会社 報告書による)

らゴルフ場の候補地としてねらわれていることに協議会のメンバーは危機感を強めている。ゴルフ場が進出してくる前に都留市当局の英断によりフィールド・ミュージアムの土地が確保され、立派な博物館が完成されることを希求している。

(i) 島根県三瓶山を自然野外博物館に

日本経済新聞の1989年2月23日の記事として上記のようなニュースが載っていた。それによると、島根県はリゾート法の指定候補地である三瓶山をフィールド・ミュージアムとして位置づける。そして島根県の自然や歴史、文化などを紹介する。総工費は32億7,200万円でオートキャンプ場、サイクリングコース、遊歩道などを整備し平成3年には完成オープンというものである。名称は自然野外博物館でもリゾート法にひきづられることなく博物館の機能や活動が発揮されることを望むものである。

(j) 国産エコミュージアム九州に生まれるか。

現地保存型野外博物館の一種として位置づけられ筆者が「生活・環境博物館」と訳した博物館の設立が目下前

向きに検討されている。場所は佐世保市鹿子前地区で西海国立公園を含めた広大な区域である。他の一ヶ所は大分県臼杵市を中心とし、それに津久見市、北海道群地域と瀬戸内海の一部を含めた文化圏である。両者共に筆者が発表した論文「エコミュージアム」を基調にして構想・計画されているもので、筆者も地元からの要請で現地を訪れている。

両地域共に共通する課題は、構造不況業種を基幹産業としてきた地域の経済的落盤と、それに伴う過疎化の進行をくい止め活路を求める道として地域の自然や文化財を掘り越こしてリゾート産業に切りかえる目玉としてエコミュージアムという新しい概念を導入しようとするものである。

白杵市地域の開発基本方針として次のような項目があげられている。

- ①エコミュージアムをベースとした体験、学習、地域共感型のリゾート形成 ②ファミリーを中心とした幅広い利用者層 ③地域の市民活動を基軸としたエコムー

ジウム・リゾートの形成 ④コア(Core)とサテライト(Satellite)の結合によるエコミュージアムの形成 ⑤エコミュージアムの基幹機能(地域研究, 博物館の機能研究, 学習, 研修研究, 広報・情報研究等)の導入と充実 ⑥エコミュージアム・リゾートにふさわしい宿泊機能の導入 ⑦研究・教育情報等の面で地域間交流の活性化 ⑧ハイテク技術への積極的取り組み ⑨地域の未利用遺産の開発 ⑩自然王国の形成。

エコミュージアムは既にフランスを中心(発祥の地)としてカナダ, アメリカ, スウェーデン, アフリカ, 南米諸国で実用化に入っている。その意味でも日本に, この種の博物館が出来ることを切望するものである。従来の博物館と決定的にちがう点は住民のなまの生活, 生産工場の作業場等も展示と位置づけていることで, まさに生きている博物館(Living Museum)を実現したものとと言える。

Ⅶ. 新しい野外博物館: エコミュージアム(Ecomuseum)

言葉の意味: Ecomuseumという言葉はEcomuseologyと共に1971年フランスのアンリー・リビエル(Georges Henri Rivi  re)によってつくられた新語である。ecoはecology(ecological)という意味であるから直訳すれば「生態博物館」ということになるが, 博物館の実態から意識すれば「生活・環境博物館」と言った方が適切であろう。

Ecomuseumの意味を定義的に述べると次のように表現することができよう。すなわち, 「地域社会の人々の生活と, そこの自然及び社会環境の発達過程を史的に探究し, 自然及び文化遺産を現地において保存し育成し展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする新しいタイプの野外博物館である。」

(1) はじめに

最近における博物館の動きを国際的にみると目新しいものが目立つ。なかでもEcomuseumはやがて, 我が国においても避けては通れない大きな課題になるであろう。創始国でもあるフランスを中心にして, 目下, カナダ(Qu  bec), スウェーデン, ポルトガル, それにアルジェリア等で壮大な実験が試みられている。また, このような動きに関連してフランスのFragmented Museum, アメリカのNeighbourhood Museum, それからRegional Museum, Community Museum, Environmental Mu-



第17図: カナダのサドバリーにあるScience North ではEcomuseumの利点をうまくとり入れている。博物館の核(Core)である中央博物館からは1日4回現地見学バスが現地のサテライトに出かける。写真はそのひとつであるニッケル鉱山で現地見学を楽しんでいる旅行者達。(After Science North 1984)

seum等の動きも活発である。以上のように一般的名称は使っていないが1984年にオープンしたカナダのサドバリー市のサイエンス・ノース(Science North, Sudbury)の実験も明らかにEcomuseumの思想に触発されているとみることができる。

いま, 世界の博物館は, 一方では伝統的な博物館が繁栄している中で, 他方では従来の博物館学(Museology)では処理できない新しい理念(Principle)に基く革新的博物館学(例えばEcomuseology)で武装した博物館(Ecomuseum)が着実に開発され, 定着し, 発展しつつある。この思想は地域住民を主人公に据えている点において, かつまた, 従来型の博物館のように時計の針を止めて見せるのではなく, 生きている社会をダイレクトに体験させる点において極めて意欲的博物館と言える。

ヨーロッパにおいてはEcomuseum設置以来, 既に十数年が経過しているので, ある程度, 実験の結果も出て来ており, 理念(理想)と現実との間に問題点もあるようである。この論文ではそのあたりにもふれてみたいと思う。

なお, 日本においてはEcomuseumの紹介記事として鶴田総一郎(1974)の論説と長谷川栄(1978)の報告がある。筆者が, この論文をまとめるに当たっては丹青総合研究所文化空間研究部の方々から種々アドバイスをいただいた。国立科学博物館の椎名仙卓図書室長からは参考文献について格別の御配慮をいただいた。また科学技

術館の企画開発事業部展示科学研究室の山田英徳氏からは多大の御助言と参考文献をいただいた。記して上記の方々に感謝の意を表する次第である。

(2) Ecomuseumの理念と発展

(A) アンリー・リビエル定義

Ecomuseumという新しい言葉の提案者であるHenri Rivière（アンリー・リビエル）が最終的にまとめたテキストの中で、次のように、その定義を述べている。

Ecomuseumは行政と住民が一体となって発想し、形成し、運営していく皆である。行政側は資材、施設それに技術者等も用意し、地域住民側からはアイデア、知能、ビジョン等を提供する形で両者が参画することが望ましい。そしてEcomuseumの機能として次の事項をあげている。

(a) Ecomuseumは住民の心を映す鏡である。

地域住民は各年代層を越えて連帯し、生活、産業、慣習等を博物館に反映し、博物館を訪問する人々はよりよき理解者となり、また尊敬されるであろう。

(b) 地域の自然と人間とのかかわりあいを表現する場である。

地域の野生的自然環境と人間によって育成された自然と人間とのかかわり合いを伝統と産業社会の発展の中であらえ、それを表現する場である。

(c) 時間の中に生きる人間を表現する。

従来の博物館は時計の針を止めた状態で、ある特定の時代の自然や人間を表現していたが、この博物館は過去から現在に至る時間の流れの中で人々の生活をあらえ、彼等の伝統、現実を現地において確認することにより、未来を予測する博物館である。

(d) この博物館は次の3大任務を遂行する。

① この博物館は研究所である。

研究テーマは第1に地域住民の生活環境（自然環境と社会環境）に関する史的研究であり、第2に住民生活の過去から現在にわたる研究から未来を予測し開発の道を求める研究所である。

② この博物館は保護センターである。

地域内に分布している自然遺産（Natural heritage）と文化遺産（Cultural heritage）を保護し、乱開発から護るという点だけをみれば、資源や遺産の保護センターということができる。

③ この博物館は学校である。

博物館地域内に生活する住民が彼等の仕事のことについて学び生産の実をあげる活動を促進させることができ



第18図：アメリカのワシントンD.C.にあるNeighbourhood Museumでは博物館構内にある農園で子供達が収穫を楽しんでいる（アナコスチア・ネイバーフード・ミュージアム，After J.R. Kinard 1985）

る学校とみることができる。また未来を予測する知識を得ることのできる学校でもある。

以上の3原則は夫々が壁をつくることなく、お互いに受け入れることも、与えることもする関係を保つことによってその機能を発揮することができる。

(B) カナダのケベック宣言（1984）

フランスに最も近いカナダのケベック（Quebec）では1974～79年にかけてEcomuseumの開発に着手し、前述したHenri Rivière（アンリー・リビエル）の指導のもとに1979～82年にかけてオーサント島（Ouessant島）に第1号のEcomuseumを完成させた。現在ではケベック・エコミュージアム協会も出来、6館が加盟している。そして1984年10月にはケベック宣言なるものを公表した。

それによると、Ecomuseumは従来の伝統的博物館を律するMuseologyではカバーしきれないので新しいEcomuseology（生活と環境博物館学）の理念に基いて設置されるべきであるとし、基本的姿勢として環境（自然、社会）と人間生活とのかかわりあいをトータルとしてとらえる活動をする博物館を求めている。そして次のような課題について考察が行われた。

(a) 新しいタイプの博物館学（ecomuseology, community museology）の15年にわたる経験を通して、社会の進展との間に生じた危険要素に関する考察。

(b) 各種の会議において出されたり感じられた課題、及びこの活動で達成した承認事項等に関する考察。

(c) いくつかの大陸における実験の反応とこの種の博物館の運営機構を設立する基礎固めについての考察。

(d) 新しい博物館学の体系の解析、構成等についての基準、方法等についての考察。

(e) 約15年にわたる実験の基盤に立ってEcomuseumやCommunity Museum (Neighbourhood Museum, Local Museum) の学説に関する考察。

以上のような討議課題について検討した結果次のような事項が宣言項目として採択された。

①全世界の博物館界は、この種の博物館像を支える積極的博物館学の体系を受入れ承認されるよう懇請する。

②行政当局はこの種の博物館の開設を援助し、この博物館原理を地方の先導概念として適応させるべく可能な段階において実施すべきである。

③この精神のもとに、密接な協力態勢をつくり、博物館学を形作る下記の恒久的組織を設置し開発と成功を期する。

④ Ecomuseum, Community Museumのための国際委員会をICOM(国際博物館会議)の中に設置すること。

⑤ 新しいMuseology (Ecomuseology) のための国際連盟をICOM(国際博物館会議)やICOMOS(国際記念物・遺跡会議)と連合させ、それらの臨時本部をカナダに置くこと。

④当座は下記の委任事項を実施する、臨時作業班を設ける。

④a 提出された組織体を設置する。

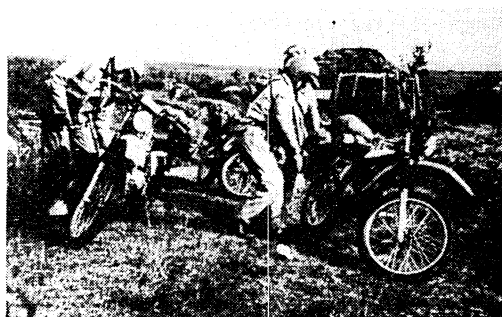
④b 目標を公式化する。

④c 会議と国際協力に関する3年ごとのプログラムを実施に移すこと。

(C) スウェーデンのEcomuseum概念(定義)

Ecomuseumという新しい博物館思想がスウェーデンに入ってきたとき、大変な議論が湧き起った。何回も会議を開き討論がくり返された。1972年にはフランスのボルドーにおいて「博物館と環境」と題してシンポジウムが開かれ、国際討論を経て、次のような合意を得るに至った。

(a) Ecologyの概念を基盤とすること。Ecologyとはギリシャ語のOikos(家族と生活の場)に由来し、ドイツの生物学者Haeckel(1873)によってつくられた言葉である。そして、その意味は、生物と彼等の環境との間の関係について研究する領域の学問である。



第19図: スウェーデン、ラップランドのJokkmokk Ecomuseum. 最近の40年間にトナカイを追う犬に代って人間がオートバイを使用するように変わってきた。エコミュージウムでは時計の針を止めようとはしていない。

(After K.Engstrom, Museum No.148, 1985)

(b) 生物を人類に置きかえて人類と環境との関係とし、自然の状態でそこで生活する人々の技術、経済そして文化の発展との相互関係を探究する。

(c) Ecomuseumは人間と環境をトータルとしてみる学際領域を扱うので従来の博物館のような扱う物を基準とした科学、歴史、美術、考古学博物館というような館種別分類基準には当てはまらないものである。

(d) 重要な概念のひとつとして地域性が明瞭であることで、例えば鉱山地帯、河畔集落、山村地帯、農村地帯、工業地区などをあげることができる。

(e) Ecomuseumの理念では、建物や施設を制限するものでもなく、特別な場所に置かなければならないものでもない。それは同じ目的を達成するために各種施設の集まりをカバーするために充実すべきである。それらの施設は博物館の主義主張のセンターに向かってネットワークされるべきである。

(f) きわめて重要な原理として、Ecomuseumの計画に当たっては、ただ単なる中央本部施設を設置したり、単に建物をつくり、学問的な資料の収集、展示、及び教育活動をするだけでは従来の博物館と変りないものになってしまうということである。

(g) 地域住民と共同して住民の希望をとり入れながら探究する。その中には彼等自身の歴史を研究したり、記載

したり、展示することも重要なテーマになる。すなわち、地域住民と密接につながりながら、その地域の発展に寄与することを目的とする博物館である。

(3) Ecomuseumの国際会議

世界におけるEcomuseum第1号はフランスのGreusot-les-Mines（1974）であると言われている。それから10年後、1984年には「Ecomuseumと新しい博物館学」のテーマのもとにケベックでフランスとカナダの国際会議が開かれ、次のような結論を得た。

〔第1分科会〕

・ Ecomuseumと深い関係を持つ博物館として次の4種をあげることができる。

- ①Regional Museum ②Anthropological Museum
- ③Open-air Museum ④Neighbourhood Museum

筆者（新井）の考えでは、この中にFragmented Museumが当然入るべきだと思う。

〔第2分科会〕

Ecomuseumは人間の歴史・社会の歴史を、その背景をなす環境の中で生態系の理論を用いて研究することである。また、環境には自然環境と社会環境とがある。

〔第3分科会〕

Ecomuseumの物理的構成として、第1にある程度の広がりを持つ地域社会（例えば20km×20km）を持ち文化圏としての特徴を有していることである。この地域内のメイン・センターは孤独な研究所ではなく、いくつかのFragmented（工場、農場、自然公園、鉱山等）を有し、あたかも衛星のようにセンターと直結しながら動いている。それらの衛星機関は土地の有効な利用すなわち、経済的開発と深くかかわりあい、地域住民の生活を支えている。

博物館の境界内にある博物館と直結している施設としては次のようなものをあげることができる。

- ① Main Center（メイン・センター）：資料の保存、研究、展示解説及び教育活動の基地で一般訪問者の受入場所でもある。
- ② Satellite center及びSatellite（衛星施設）：地域内にある工場、鉱山、牧場、農場等で博物館の研究基地であるが一般訪問者も受け入れる。
- ③ Field Study Center（野外研究センター）：野外研究（環境と人間及び生活）の基地であるが同時に文書資料館も兼ねている。
- ④ Storehouses（倉庫）：博物館活動に必要な物品及び博物館資料の収蔵庫。



第20図：ポルトガルのAlcochete Ecomuseum.

海岸に面したこの博物館では近代的製塩法に加えて昔ながらの塩田で働く住民の姿が見られる。

（Museum No.148, After A.Nabais 1985）

〔第4分科会〕

Ecomuseum存在の意義と価値について論ずるならば、この博物館は、その地域社会における文化及び経済発展の道具としての意義を持っている。従って行政の機関としても重要な価値を有するものである。地域住民は見学者（利用者）であると同時に出演者（提供者）でもある。

Ecomuseumは目下壮大な実験を進めている段階であり、教科書もなければ参考書もない。従って行く手には困難な課題も多く出てくることであろうが、多くの人々が討議することにより成功への途が開けることであろう。

(4) フランスのEcomuseum

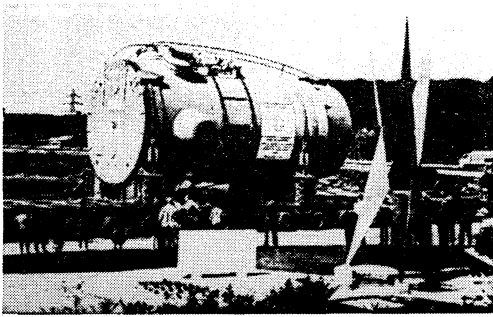
(A) Open-air Ethnological Museum(野外民族学博物館)からEcomuseumへ

Ecomuseumの創始者はフランスのHenri Rivièreであることは既に述べたとおりであるが、彼は決して無から有を生んだのではなく、具体化するためのモデルとして北欧に広く分布し成功している、いわゆるOpen-air Museum（オープン・エア博物館）をえらんだ。

Open-air Museumは主として農村にある伝統的な建物を集めて、それを公園のようなところに移設しているが、この場合建物に附随して、彼等の家畜や生業に従事している職人から設備、家具、道具類までも一緒にセットして移設（移住）させている野外博物館の一種である。

Ecomuseumは前述したOpen-air Museumにヒントは得ているものの、その理念において、基本的形態において、かつまた、その目的において全く相違している。

(a) Open-air Museumが人工的に造成された遺跡であ



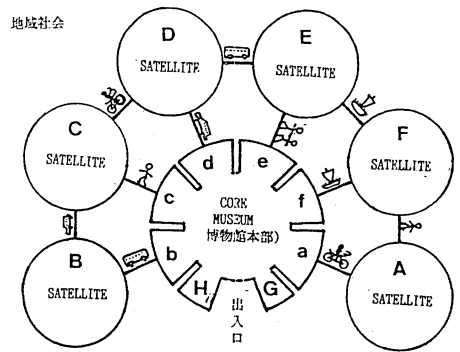
第21図：フランスにあるエコミュージアムの一種，Le Creusot-Montceau-Les-Mines Fragmented Museum. 見学コースの中には野ざらしの醸造用の大樽が現地保存されている。（After Varine-Bohan 1973）

るため建物や道具類等には価値があっても土地につながらず遺跡的価値は皆無である。それに対してEcomuseumは土地すなわち地域社会とのつながりを最も重視し、人なり物なりが生まれ育った環境を離れては存在し得ない野外博物館である。前者は筆者（新井）がいう収集展示型野外博物館であるのに対して、後者は現地保存型野外博物館に属する博物館である。

(b) Open-air Museumは人為的にある時代を固定して、言いかえれば時計の針を止めて、その時代の人々の生活空間を復元させるSpatial Museum（空間博物館）であるのに対し、Ecomuseumは特定の文化圏を持つ地域社会を史的生態学の眼を通して研究的にみようとするものである。従って過去から現在、現在から未来へ発展する社会を予測しようとする博物館であるために、生きている現実の地域社会を基盤にしている。すなわち、動いている時計の針と共に年輪を重ねる社会を環境の中でChronological（年代学）に展示解説しようとするtemporal Museum（時間の博物館）ということができる。

(B) マルケースのエコミュージアム（The Ecomuseum of Marquéze, Sabres）

ボルドーの南西、ギロンデ川の三角州南端は大西洋の海岸に近く、海岸砂丘を広く覆ってカシの森林が発達している自然環境の良く保存されている区域である。住民の多くは農業を営み林を切り開いた空間には農場、農家集落、納屋等が散在している。従って、この地は陸の孤島のようなところで昔から特徴のある文化圏を構成している。自然の景観も美しいところから、既に自然公園として保護されてきた地域である。この地域社会がEco-



エコミュージアム概念図の説明

- I エコミュージアムの地域社会
行政圏よりも、むしろ生活圏とか文化圏の方が望ましい。フランスのル・クルーゾー・モンソー・レ・ミヌのエコミュージアムは2町14村を包含し、その広がりには25km四方に及んでいる。
- II CORE MUSEUM (コア・ミュージアム)
エコミュージアムの中心核でサテライト博物館へ送る情報や見学者の基地的役割を担当する。a, b, c, d, e, f は、それに対応する A, B, C, D, E, F (サテライト) への導入と案内的展示室である。
G室----- 管理室、事務室、ミュージアム・ショップ、講義室、会議室
H室----- 研究室、図書室、実験室、実習室、資料室
- III SATELLITE (サテライト)
A サテライト----- 野生生物観察地帯 (山、川、海岸、平野等)
B サテライト----- 天然記念物及特産地帯 (地産、水産、植物、動物)
C サテライト----- 生産工場、鉱山 (採掘場、精錬場)、製造工場、発電所等
D サテライト----- 農村 (農場、牧場)、漁村 (漁港、釣り)、山村 (林業、果実園等)
E サテライト----- 史跡、遺跡 (考古、歴史、民俗、城郭、町並み、偉人の家等)
F サテライト----- 産業遺跡 (製鉄、工場跡地、採石場跡地等)
- IV エコミュージアムの関連施設
(1) ホテル・宿泊施設 (2) レストラン (3) ミュージアム・ショップと土産店 (4) 運輸・交通機関の整備 (5) キャンプ村 (6) エコミュージアム専用バス

第22図：エコミュージアム形態的概念図

museumとして指定され、そのメインテーマとして「この地域の最も古い時代から今日までの自然と住民のかかわりあい」がとりあげられ、研究、展示等が開始された。

保存、展示対象物として、優れた自然景観を全地域の中から選んで残すこと。文化遺産としては7つの農場、37群の建造物とそれに附随する納屋、家畜小屋、鶏舎等である。また、1836年の土地台帳に記録されている古い農場を復元する作業も進めている。これらはすべて、この博物館の展示そのものである。

(C) ル・クルーゾー・モンソー・レ・ミヌ（Le Creusot-Montceau-les-Mines）1974年開館

フランスのリヨンの北約100km～120kmの山の中にあるこの地方の中心都市ル・クルーゾーという町とモンソー・レ・ミヌの町を含み、なお15の村を包含している約25km四方の地域社会全体を博物館としている。人口は15万人、住民は農業、鉱山、工場「人間と産業の博物館」（The Museum of Man and Industry）と呼ばれ、別名ではFragmented Museumとも呼ばれている。1971年から地域

住民の協力によって創設され、大きな実験が進行中である。25km四方の地域社会の中には水車小屋、製粉場、工場、鉱山（ウラニウム）、製鉄場、鍛冶屋、先史時代の遺跡、野鳥の聖域、自然公園、教会、製パン工場、名勝地、水路等村や町や森それに住民の生活の場が散在している。この博物館は旅行者を受け入れるところというよりも、むしろ住民のためにあるといった方が適切である。上述の地域構成物は見学の対象物であり、実験の場であり、説明に供されている。また建物の中には展示や催物の会場に利用されるものもある。また事務室や実技室にも活用されている。このようにして町や村にある建物は博物館活動の戦線に組み込まれている。しかし、これらの建物は法的には博物館の所有物ではない。

博物館活動の行為者はすべて住民によって構成されている。地域住民は、それぞれ本人の希望により各種博物館活動に参加している。とは言ってもこれらの人々は生業を持っているので、実際の日常的運営担当者として専任の職員も勤務している。専任職員は特に専門的職種において必要である。職務としては調査・研究、資料保存技術、目録作成、催物の企画と指導等に関することである。地域住民と専任職員との関係は鐵とアブラムシのように共生関係にある。

博物館活動の行為者には3種類あり、契約者、ボランティア、それに共鳴者である。

(a) 展示：テーマは社会の生活、環境、芸術と産業、樹木と環境問題等

(b) 調査：社会の徹底的調査（建物、町並、集落、自然景観等）

(c) 科学研究センター活動：産業の開発

(d) 生涯教育活動：Folk high schoolの開講

博物館の管理運営は1974年開設以来3つの独立した委員会の組織で運営している。

①利用者委員会 ②科学技術委員会 ③管理委員会である。各委員会には委員長を置く。最高役員会は各委員会から選ばれた同数の代議員によって構成されている。これが博物館の意志決定機関である。

(5) おわりに：Ecomuseumの実態

Ecomuseumは理論の段階から実験の段階に入っていることは既にこの論文中でも再三述べてきたところである。しかし定着までにはなお歳月を要することであろう。

Ecomuseumは従来の博物館学（Museology）とは異なったEcomuseologyという学的理念に支えられているので、今後は、理念と現実の博物館との矛盾やくいちがい

をどう調整するかが焦点になることであろう。この課題については、既にFrancois Hubert（1985）が「フランスにおけるEcomuseumの矛盾とゆがみ」と題して述べている。最大のなやみは広大な土地（25km四方位が適当と言われているが）の確保である。経済的な負担も大きい。1977年以降のEcomuseumは面積が小型化しており、特色のある文化圏の単位をカバーできない実情にある。また、博物館地域に生活している住民との関係をみると、社会経済変革に反対する人々の避難場所（隠れ家）になるのかの選択もせまられている。また、地域社会の住民に支持されるCommunity ecomuseumと行政的立場に立つInstitutional ecomuseumの対立関係をどう調和させるかといった問題も派生している。Henri Rivièreのプリンシプルにある行政は施設と予算（金）を、住民は知恵をという思想も現実には、そううまく行っていない。一方、展示解説の面で見ると、Ecomuseum内にある工場の説明でも、工場主は地域社会の発展の歴史としてとらえるよりも技術史の面の方を強調したがる傾向があったり、19世紀の工場経営者の温情主義が前面に出て解説文を飾るようになり労働運動史不在となるあたりにも、ゆがみが感じられる。

Ecomuseumはそもそも、その目的が地域社会に奉仕し、地域社会を改善するインストルメントという旗を掲げている限り、Rivièreによって投げられた火は今後大きく燃え広がっていくことであろう。

【野外博物館参考文献】

Almeida-Moro Fernanda de Camargo : 1985, São Cristóvão : a District Ecomuseum. Museum Vol.37 No.148.

新井重三：1956, 野外博物館, 博物館学入門, 206～216頁, 理想社。

Arai Juzo : 1958, Local Museum in Japan, Nature Trails, Museum (UNESCO), Vol.10, No.1.

新井重三：1964, 学校岩石園（地学園）の計画と設置の研究, 博物館研究, 37巻6・7合併号。

———：1979, 地域における公立自然史博物館の建設と活動—エメラルド・ネックレスを例として—, 博物館学雑誌, 3・4合併号。

———：1983, 野外博物館と総合博物館について, 史跡整備の方法, 千葉市教育委員会。

———：1984, 野外博物館の概念と分類, 特集—野外博物館, コンセルボ, 6号, 文化財保存計画協会。

———：1985, 野外博物館と野外展示について, 千葉

- 市史跡整備基本計画, 千葉市教育委員会。
- : 1986, 博物館と環境教育, 博物館学雑誌, 11巻2号。
- : 1987, 野外博物館総説, 全日本博物館学会ニュース。
- : 1987, エコミュージアム, Gazette, Vol.2, No.3, 丹青総合研究所。
- : 1987: エコミュージアムとその思想, 丹青, 7巻10号, 丹青社。
- : 1988, 野外博物館に突然変異: エコミュージアム, Museum Data, No.5, 丹青総合研究所。
- Arnold J.E.: 1986, Independent Industrial Museums, Museum Journal, Museum Abstract, Vol. 2, No. 3.
- Barton K.J.: 1987, The Hampshire County Museum, The Hampshire Farm Museum, Museum Journal Vol.86, No.4
- Brown Ian: 1986, Halliwell's House Museum, Museum Journal, Vol.18, No.21.
- Brumhead Derek: 1985, National Stone Center, AIA Bulletin, Vol. 3, No. 4.
- Burcaw G. Ellis: 1980, Can History be too Lively, Museum Journal, Vol.80, No. 1.
- Crus-Ramirez Alfredo: 1985, The Heimat museum a Perverted Forerunner, Museum, Vol.37, No. 4.
- Cutting Jim: 1985, Science North, A Different Approach to Science Centres, Muse, spring.
- Dale E.: 1954, Audio-Visual Methods in Teaching, New York, The Dryden Press.
- Donkov, Lazar: 1985, Etar Ethnographical Park-Museum at Gahrovo, Bulgaria, Living Museum, Museum, Vol.28, No. 1.
- Doughty, Phillip: 1975, Environmental Museum and Environmental Exhibits, Museum Journal, Vol.75, No. 3.
- Engström, Kjell: 1985, The Ecomuseum Concept is Tating Root in Sweden, Museum, Vol.37, No. 4.
- Ford, Olwen: 1985, Melbourne's Living Museum of the west-a Museum without Walls, Museums Australia Vol.19, No.26.
- 藤島玄治郎: 1978, 野外博物館展示の家, 野外博物館総覧, 日本博物館協会。
- Harris, Julie: 1985, Ecomuseums in France: Exhibition Review, Museum Quarterly Vol.14, No. 3.
- 長谷川栄: 1982, これからの美術館, 鹿島出版社。
- 端山貢明: 1981, 北米大陸の科学博物館に見る博物館の流れ, 全科協ニュース, 11巻2号。
- 堀込憲二: 1988, エメラルド・ネックレスとトレイルサイド・ミュージアム, MDB Gazette, Vol. 3, No.4-5.
- Hubert, Francois: 1985, Ecomuseums in France: Contradictions and Distortions, Museum, Vol.37, No. 4.
- In-jae, Maeng: 1986, The Korean Folk Village, Museum, Vol.38, No. 1.
- Julien, Robert: 1987, Natural Heritage and Museums: A Future for Tomorrow, ICOM News, Vol.40, No.1.
- 科学技術庁資源調査会: 1988, フィールド・ミュージアムの展開の推進, 同調査会報告109号。
- 菊池重郎: 1976, 野外博物館スカンセン(上), 博物館研究, 11巻9号。
- Kim Taik-Kyoo: 1986, Hahoe-dong Village, Museum, Vol.38, No. 1.
- Kinard, J.R.: 1985, The Neighbourhood Museum as a Catalyst for Social Change, Museum, Vol.37, No. 4.
- : 1972, The Anacostia Neighbourhood Museum, Smithsonian Inst, Washington, D.C., Museum, Vol.24, No. 2.
- 木場一夫: 1949, 新しい博物館, 日本教育出版社。
- Konaré A.O.: Ecomuseums for the Sahel: a Programme, Museum, Vol.37, No. 4.
- Lord Denis: 1986, Ecomusée de Saint-Constant.
- Lacy Brian: 1986, What's Wrong with Heritage Parks? Irish Museum Association Newsletter, Museum Abstract, Vol. 2, No. 4.
- Mayrand Pierre: 1985, The New Museology Proclaimed, Museum, Vol.37, No. 4.
- McCrinkle Neil: 1986, The Changing Face of an Industrial Legacy, Carrick Herald, Vol.23.
- McLean Colin: 1986, The Scottish Mining Museum, Heritage Interpretation, No.33.
- : 1986, Interpreting Our Industrial Heritage: the Approach at the Scottish Mining Museum, Scottish Museum News.
- Nabais Antonio: 1985, The Development of Ecomuseums in Portugal, Museum, Vol.37, No. 4.
- Moniot Francois: 1973, The Ecomuseum of Marguèze, Sebres, Museum, Vol.25, No.1-2.
- 岡崎普, 杉本尚次(編): 1978, スエーデン, デンマー

- ク野外博物館，講談社。
- Petersen, B. Joan : 1986, Bowden House, Totnes, Devon, Heritage Interpretation, No.33.
- Pierssene Andrew : 1986, Can We do Better than Nature Trails-Ecology and its Interpretation, Heritage Interpretation, No.32.
- Pinna Giovanni : 1976, Creation of Fossil Museum at Besano, Italy, Living Museum, Museum, Vol.28, No. 1.
- Preece Geoff : 1985, The Museum of Mining, Museums Journal, Vol.85, No. 1.
- Rivard Rene : 1985, Ecomuseums in Quebec, Museum, Vol.37, No. 4.
- Rivière Georges Henri : 1973, Role of Museum of Art and of Human and Social Science, Museum, Vol. 25, No.1-2.
- : 1985, The Ecomuseum-an Evaluative Definition, Museum, No.148.
- 斉藤忠 : 1984, 村落博物館と遺跡博物館，歴訪世界の博物館，六興出版KK。
- 佐々木朝登 : 1985, 野外博物館整備の方法，千葉市史跡整備基本計画，千葉市教育委員会。
- 里貝親幸 : 1988, サイエンス・ノース調査レポート，Museum Data, No. 6.
- Simon-Okshevsky Ute : 1986, The German Heritage Museum, Museum Quarterly, Vol.15, No. 1.
- Smith C. Lavett : 1966, Sanctuaries for Science, Museum Field Station, Curator, Vol. 9, No. 3.
- Smithurst, Peter G. : 1986, Sheffield's Industrial Museums, Museum News, No.36.
- Smout Pernille : 1986, Scotland's Fishing Heritage Trail, Scottish Museum News, No.18.
- 杉本尚次 : 1978, フィールドに息づく民家と村落の伝統，世界の博物館シリーズNo.14，講談社。
- : 1980, ヨーロッパ民家の民族学的，地理学的研究，国立民族学博物館研究報告 5 巻 2 号。
- : 1986, ヨーロッパの野外博物館，国立民族学博物館研究報告11巻 1 号。
- Sultow Bogdan : 1985, A Site Museum near Pavlikeni, Bulgaria, Museum, Vol.37, No. 3.
- 棚橋源太郎 : 1947, 世界の博物館，講談社。
- : 1950, 博物館学綱要，理想社。
- Taylor, Donald, M. : 1985, Regeneration of Edinburgh's Old Town, Prospect, No.24.
- 鶴田総一郎 : 1974, Fragmented Museums (資料群博物館)，全科協ニュース，4 巻 8 号。
- : 1974, Ecomuseum (環境博物館)，全科協ニュース，4 巻 8 号。
- Varine-Bohan Hugues : 1973, A 'fragmented' Museum, the Museum of Man and Industry, Le Creusot ~ Montceau-Mines, Museum, Vol.25, No. 4.
- : 1985, Ecomuseum, Museum, No.148.
- 矢野和之 : 1984, 野外博物館のめざすもの，特集-野外博物館，コンセルボ，No. 6.
- 山田英徳 : 1984, サドバリーのサイエンス・ノース，全科協ニュース，14 巻 4 号。